

# かに

KANI



松田雷

7  
第13号

## 表紙のことは

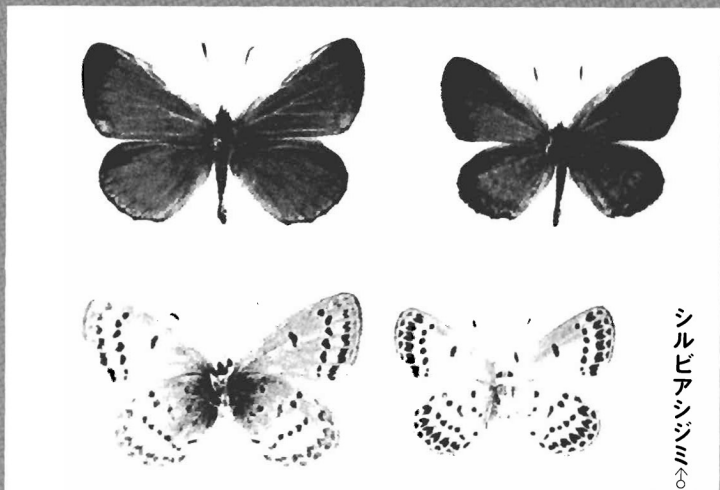
癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行なわれている。英仏語の **Cancer** は、ラテン語のまま、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、カンケルを「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下のリンパ腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、リンパ管までおかされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鉗やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中品の山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

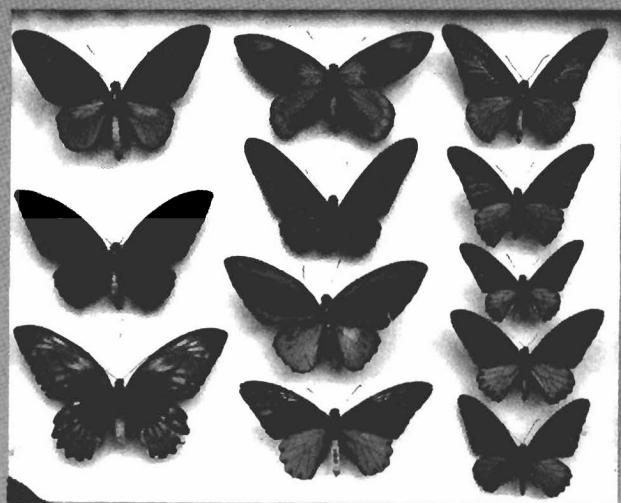
表紙の絵は「がざみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋岸の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧にもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ（浸潤）や、方々への飛び火（転移）は、この蟹の性癖で巧に表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部の苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの——一般人の理解と協力——なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝)



(左一春型、右一夏型) 若林守男氏提供



蝶 中原コレクションの一部



トロシー夫人像 1920年代作



アネモネ 1970年代作



鈴木春信を模して 1920年代作

# 加 仁 第 13 号 目 次

## 中原和郎先生追悼号

カラーページ

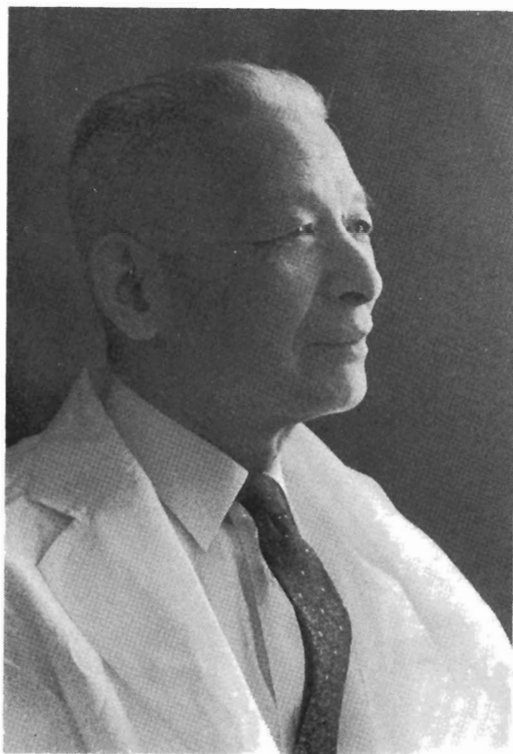
弔 辞	田 中 正 巳	8
永遠の青年, 中原和郎先生	山 村 雄 一	10
W.N'.s Early Years in America	中 原 ド ロ シ ー	13
中原和郎先生を偲ぶ	成 富 安 信	16
シルビアシジミ, そして中原先生	緒 方 正 美	19
理研から国立がんセンターへ		
中原先生とのおつきあい	武 見 太 郎	24
鼎談 中原先生を偲んで		28
田 宮 博 秋 谷 七 郎 樽 谷 和 男		
瑞泉寺	菅 野 晴 夫	45
中原先生の思い出	小 野 哲 生	47
中原先生の思い出	遠 藤 英 也	49
中原先生と私とのある繋がり	馬 場 恒 男	54
卓越した管理者	林 弘	58
— 隠された一面 —		
中原先生とフロンティア精神	永 田 親 義	61
中原先生の詠草に思う	福 岡 文 子	66
中原和郎先生の思い出	西 村 暹	70
財団法人がん研究振興会役員・評議員名簿		72
あとがき, 編集同人名簿		



- ◆表紙絵解説 久留 勝
- ◆表紙構成 長尾みのる
- ◆カ ッ ト 山田 喬



■ 中原和郎先生追悼号 ■





## 中原和郎博士 略歴

明治29年9月14日 鳥取県において日本で最初に冷蔵食

品事業を興した中原孝太氏の長男として出生

大正3年3月 東京私立京華中学校卒業

大正7年6月 米国コーネル大学生物学科卒業

大正8年7月 ロックフェラー医学研究所研究助手

大正14年9月 東京帝国大学伝染病研究所、財団法人理

化学研究所、社団法人癌研究会の嘱託となる

昭和2年4月 癌研究会賞受賞

昭和9年5月 財団法人癌研究会研究所病理部長

昭和16年4月 癌研究会賞受賞

昭和21年4月 財団法人理化学研究所主任研究員

昭和21年5月 日本農学会賞受賞

昭和22年2月 朝日文化賞受賞

昭和23年10月 財団法人癌研究会研究所長

昭和24年1月 日本癌学会機関誌「癌」編集委員長（以後15年間に亘る）

昭和29年10月 国際対がん連合ACTA編集顧問及び公

衆教育部会委員（以後10年間に亘る）

昭和37年5月 国立がんセンター研究所長

昭和37年7月 ストックホルム化学会金賞受賞

昭和38年2月 WHOがん専門委員会委員（以後5年間に亘る）

昭和40年5月 日本学士院賞受賞

昭和41年3月 ソビエト社会主義共和国連邦医学アカデ

ミーピロゴフメダル受賞

昭和44年2月 高松宮妃癌研究基金学術賞受賞

昭和49年9月 国立がんセンター総長

昭和49年12月 日本学士院会員

昭和51年1月21日 逝去さる

亡くなられた当時は、国立がんセンター総長の他、中央薬事審議会臨時委員医薬品特別部会委員、厚生省がん研究助成金運営打合せ会会長、文部省学術審議会専門委員、埼玉県立がんセンター顧問、日本癌学会理事、財団法人日本対がん協会顧問、高松宮妃癌研究基金審査委員、日本学士院会員、当会理事及び審議会委員長、ニューヨーク科学アカデミー会員及び特別会員、アメリカ癌学会名誉会員などを務められた。

わが国のがん研究の最高権威であり、日本はもとより国際的な立場で、がん研究、がん対策の分野に大きな足跡を残され、従三位勲一等瑞宝章を授与された。

# 弔 辞

田 中 正 巳

謹んで故国立がんセンター総長從三位勲一等中原和郎先生の靈に弔辞を捧げます。

先生は、その生涯を医学の研究とわが国医療の向上に尽瘁されてこられました但不幸にして病魔におかされ去る一月二十一日ついに不帰の客となりました。

われわれ一同その突然の訃報に接し悲愁筆舌につくしがたいところであります。

顧みますと、先生は大正七年六月米国コーネル大学生物学科を卒業後、ニューヨーク、ロックフェラー医学研究所においてがんの生物学的研究に着手され、大正十四年帰国後は東京帝国大学伝染病研究所、理化学研究所、財団法人癌研究会研究所病理部長及び所長等を歴任し、この間、がん研究一筋に取り組み、がん組織が生み出すがん毒素「トキシホルモン」の発見、抽出に成功され、またがんのエネルギー理論にもとづく「発がん加算学説」等の研究業績は臨床医学に大きな功績を残されましたがとくに昭和四十年三月には「がん毒素及び発がん物質に関する研究」により日本学士院賞を受賞されましたことは、先生の偉大なる功績を物語るものであります。

さらには、日本学士院会員、ニューヨーク科学アカデミー会員、米国がん学会名誉会員、WHOがん専門委員会委員等としてがんに関する広範な基礎的研究など、医学界におけるがん研究の最高権威者として国内はもとより世界におけるがん研究の推進に多大の貢献をされたのであります。

昭和三十七年五月国立がんセンター設立とともに初代研究所長となられ、ついで昭和四十九年九月同センター総長の重責に就任されてからは、わが国のがん対策の中心的指導者として医療行政の推進に寄与するとともに最も進歩的な視野に立って、研究領域の開発に情熱を注ぎ世界の学界第一線をいくべき研究所をつくるため近代科学の優秀な若き研究者の集結に尽され完成された今日の研究所をみるに至ったのであります。

また、海外医療協力の一環としてタイ国がんセンター設立援助計画を推進され昨年十二月に同病院部門を完成に導くなど医学を通じ広く人類の福祉に貢献された功績ははかり知れないのであります。

このように先生が誇りうる数々の栄誉は語り尽せぬものがありますがまた、一面には故佐々木信綱博士に師事して短歌をよみ歌集「雁」を出版した詩人でありあるいはチョウの世界の収集家として名高かったことから先生の人柄を偲ぶことができます。

わが国のがん対策の現状は予防、研究、研修者の教育等の各方面において、今後さらに先生の手腕に期待するところすこぶる大きいものであります。天余命を与えず不幸にしてご他界されましたことは、医療行政に関係する者と否とを問わずひとしく哀惜の念に堪えないところであり国家のためにも痛恨の極みであります。

しかしながら先生が残された数々の業績は永く燦として輝き先生の薫陶を受けた幾多の後進は相携えて先生の偉業を継ぎ先生の抱負の実現に邁進することでありましょう。

ここに先生が多年にわたり医療の向上に残された功績を讃え心からご冥福を祈り謹んで弔辞といたします。

昭和五十一年二月四日

(厚生大臣)

# 永遠の青年、 中原和郎先生

山村雄一

特別講演を終えられたその日の中原先生は独特の学者らしくひきしまり、端正な顔をほころばせながら降壇されてきた。講演を終り、一仕事を済ませたという実に気持ちよさそうな顔付きで、青年のようにいきいきとしておられた。

「やあ、少し予定よりも大分はやく終りすぎたのではないかね」先生はにこにこしながら私に話しかけられた。

私は一瞬どういう風に答えようかと言葉に迷った。

「いや先生、一時間半近くです。三十分近く超過していません」私は正直に時間の遅れをお伝えした。

「本当かね。それはすまなかつた」と謝られたが、それでも実に楽しそうであった。私は念願の先生の特別講演を大阪で聞かせて頂いたことに対し、そしてそのご講演

が先生ご自身、時間延長にお気付きにならないほど情熱のこもったものであったことに対し、率直に感動し、目が熱くなった。

この数十年間におけるがんの研究において、いくつかの非連絡的といってよい階段を飛び上がるようなすぐれた研究が行われているが、その歴史をひもといてみると、先生はほとんどの場合といってよいほど、先駆的なひき金をひいておられる。その鋭い先見性と、正確な実証性に関して世界の学者のなかで比肩できる人はほとんどないといってよいのではないか。

トキソホルモンの発見、とその概念の確立、強力な発がん性物質4-ニトロキノリン-N-オキサイドの発見、  
Greenstein—中原の第2法則、DAB肝がんのビタミ

ンによる抑制実験など先生の残された業績はがん研究の一つの領域の突破口となつていくことが多い。

先生のご講演は「がんに関するいくつかの問題、とくに今流行となつていくウイルス発がんやがんの免疫を中心として評論家としての立場から講演をしたい。評論家というのは自分では新しいデータを持たないで天下を制している学説に挑戦できるのです」ということからはじまった。なるほど先生はがん研究において常に第一線の指導者であり、また自ら手を下して行つた実験家であつた。そのことは国立がんセンターの総長となつてからも続いていたことは誰しもが知っている。しかしこの講演では先生の嫌いな評論家の立場で講演するといわれぬ。「疑つて疑つて、疑いぬいて、それでも疑う余地のないところに真理があり、疑うことが学問の第一歩である」とはその後に続いたお言葉であつた。

先生がコーネル大学を卒業されてロックフェラー研究所の Assistant となられた頃、それはつまり半世紀の昔にさかのぼることであるが、どのような俊秀がひしめいていたか。所員の絶対数は少なく、研究所の規模は小さかつたが、その頃いかにすぐれた研究が展開されていったか。Simon Flexner を所長とした Alexis Carrel, P. A. Levene, 野口英世、O. T. Avery, J. B. Murphy, Peyton Rous, D. D. Van Slyke, John H.

Northrop などノーベル賞受賞者をふくめて、研究陣の豪華さは驚くべきものであつた。

「あの当時のことを考えると、少数のスタッフで狭く新しい研究所が当時の世界の医学のメッカであつた。研究所などは余り大きくするものではない」とは先生一流の主張でもあり、皮肉でもあつた。

そしてあの当時から五十年余り、理研、癌研、がんセンターに籍をおかれて世界のがん学界をリードされるとともに、わが国のがんの学問の進歩に尽された。ことに後継者の養成に尽されたことは現状を見ると明らかである。

評論家の立場からと断つて講演されたのにもかかわらず、先生のご講演は多分に研究を中心としたものであつた。

最近におけるがんウイルスやがん免疫の研究などについて批判をこめて将来の進路についても示唆深い内容であつた。すぐれた研究者でなければ、真の意味での評論を行うことはできないことを自ら示されたといつてよい。

私は座長席に座つてご講演に耳を傾けながらただ感動していった。八十歳近くには達するご老令で、しかもこの情熱と若さ、頭脳の柔軟性と鋭さ、先見性と批判力、そのいづれをとり上げても現役の（先生も現役ではあつた

が)研究者は頭が上がらない。非凡な人はやはり非凡だ。おそらく聴衆の大部分の人達が同様な感じを持ったと思う。

ご講演の最後に、ゲーテの言葉を引用された。森鷗外の翻訳を改めて、先生の訳は次の様なものであった。

自然の神秘を讃へしを

解明せむとためしみむ

象となして示せしを

結晶化せむところみむ

これももちろんゲーテの「ファウスト」の一節であるが、日本語に訳されて先生の言葉になったと思われた。先生はまさに永遠の青年であった。あたかもゲーテのように。

その先生が三月ほどのうちに卒然として逝去されるのは誰が想像できたであろうか。

永遠の青年である先生のお姿を今や見ることはできない。しかし、日本のがんの学問のなかに、あるいはがんの研究者のなかに、先生は今も尚生きておられる。若々しく、永遠に。

(大阪大学教授)

八重小律致糸糸はよて

わかねとも正しく道乃

あまむふりけり

和正

## W. N.'s Early Years in America

中原 ドロシー

夫、中原和郎が、コーネル大学の大学院で昆虫学の勉強をするために、米国に渡りましたのは、今から、六十年前のことです。

当時、彼は未だ十代の青年でございました。文通のみで、彼のことを知って居られました。昆虫学科の、ジェームス・ニードム博士は、和郎の、蝶に関する論文から推測して大学院に入る資格があると考えられました。

彼は一九一八年に、博士号を得ました。動物学部の学部長の下で、学位論文を書いて居りました和郎と、学部長の秘書をして居りました私との場合は、極く自然のこととてございました。私が和郎と同じ年にこの学部長のところに参りましたのも偶然でありました。新参者同志のこの年のことを、私は今も印象深く憶えて居ります。

二人の出会いには、いつか、コンサートや、映画などの、デートに、変わって行きました。私は、この若い青年の礼儀の正しいことに深い感銘をうけ、心を動かされました。というのは、多くの学生は礼儀などは気にかけていないように思われたのでした。

デートは、やがて、婚約に進み、一九一八年六月に結婚いたしました。和郎がロックフェラー研究所で、研究助手の職を得てすぐのことでした。リレイ博士は、この若い日本青年に深い関心を持ってくださり、和郎が、アメリカに滞り、研究を続けることを望んでいることを知り、ロックフェラー研究所と、イリノイ州のアーバナにある、イリノイ大学に推選してくださったのでした。両者から、快く、承諾の旨の返事を受けとり、和郎は、そ



のいづれかを、選ばなくてはならなくなりました。イリノイ大学は、ロックフェラー研究所よりも、高給が支払われることになって居りましたが、リレイ博士は、ロックフェラーが、著名であることを強調されましたので、彼の研究活動はそこで始められることになりました。

入所当初は、彼は未婚者でしたので給料は少なく、結婚直後の家計のやりくりは大変なものでした。私共の夕食は、キャベツとコンビーフだけ（一番安い食事）のことが往々にしてありました。



新婚時代 アメリカにて（1920）

ごくはじめのうちは私の父が援助してくれましたが、間もなく父が大手術をうけたため、私は、家計の苦しい事はひとことも申しませんでした。

和郎の父は、私共の結婚に反対しひどく憤り一通の手紙さえよこしてくれませんでした。母は同情し、英語で私にあてて手紙を書いてくれました。その手紙を私は今も宝物として、大事に持っております。

ロックフェラー研究所の、ジェームス・マーフィー博士の下ですごした数年間は忙しく、そして幸福でした。

ただ、一九二二年から一九二三年にかけて和郎は、結核に冒され、二ヶ月間サナトリウムですごし、その後、三々四ヶ月ニューヨーク州、イタカの私の父の家で静養しなければなりません。快復して、再びロックフェラーでの仕事にもどることが出来ました。（アメリカでの夏休みは七月・八月の二ヶ月あり、私共は、イタカの近郊のカユガ湖の父の別荘で、家賃の心配なくすごしました）

この病気ですごした事をのぞけば、最初の六年間は、いとも幸福で

ございました。

和郎は細胞の研究に興味を持ちはじめました。給料も人なみになり、時々、映画に出かけたり、静かな夜を、デュマ、ディケンズ、アナトール・フランスなどを読んですごしたりしました。又、友人も訪ねてくれました。杉浦兼松博士も、その中の一人でございました。

この平穩な生活にある変化がおこりましたのは、一九二五年のことでございます。

種々の理由で和郎は日本に帰る決心をいたしました。そして日本での職を探しました。幸運にも、伝研と理研から声がかかりました。(外人の妻を持つ人はお金がかかると思われたのでしよう)私の両親はじめ、私の友だちが、和郎の帰国に反対いたしましたのは当然のことでしたが、どうしようもありませんでした。私自身は、十四歳の時、地理の授業で日本について学んで、日本に関心をもちはじめ、日本の事物に興味を持っておりました。少女のころ「いつか私は日本に行ってみる」と言っていて、そんな事は出来ないかと友達に笑われたのを、憶えて居りません。

一九二五年九月十二日、私共は東京に着きました。二はじめの一年は、アメリカへのホームシックにかかりましたが、その後は多くのよいお友達に恵まれ、日本での生活をたのしんでまいりました。とはいふものの、日本

の生活様式は、五十年前は今とは比較にならないほど異って居りました。

時は 今や消えつきた焰からたなびく

煙のように すぎ去ってゆく

季の移り変りを 彼は知らない

春は夏に 彼のイーゼルは壊れ

絵筆は 乾いた

夏は秋に 蝶は も早 彼の網を

おそれることもない

秋は やがて 冬に

彼のマントは 今は ナフタリンの中

静かに ねむっている

かつての彼の机は 今はずつろ

ただ 彼の ポートレイトが

花に ほほえみかけている

※この訳詩の原詩は23頁参照

# 中原和郎先生を偲ぶ

成 富 安 信

去る一月、八十歳の高令で亡くなられた国立がんセンター総長中原和郎先生は、もと世界の美麗蝶の蒐集家であったと同時に日本産蝶の分類研究者として著名であった。晩年にはその老大なるコレクションを国立科学博物館に寄贈され、以後はカゲロウの分類などにいそがしまれていたが、戦前には九大の故江崎悌三教授と並んで華々しく研究発表をされ、例えば「ゼフィルス」誌の一卷から九巻まで毎巻先生の報文を見ない巻はなく、その大きな研究足跡は時代の変遷によっても変わるものではないと信ずる。

私の中原先生との出会いは昭和十三年に遡る。当時私は中学二年生であったが、昆虫の分類に造詣の深い熊沢信義先生が学校の生物教師であられたことから、蝶の分

類に興味をもちはじめていた。ある日長野県碓氷峠で採集した珍奇な蝶の同定ができず、偶々中原先生と同じ理研鈴木研究室に在籍されていた方のご紹介で、先生を自宅にお訪ねしたのが初対面であった。先生は一介の少年である私に対しても、所蔵の標本や文献などを示され懇切に相談に乗って下さったが、私の持参した問題の標本はサカハチチョウの顕著な異常型であることが判り、先生から命名規約を含む種々のご指導をいただいて「虫の世界」誌に発表した。(ab, *usuiana* がそれである。) 当時は戦後と違い異常型にも命名が行なわれていた。) それ以来各地で珍しい標本を採集・入手する度に、先生のお宅へ足繁く通って親しくご指導を賜っていた。そうした際に先生は折にふれて、「蛾は応用分野があるから

よいが蝶の分類は趣味でやるならともかく……」と私にさとされた。少年の個性を見通した、人生航路を誤らしめないようにとの行届いたご配慮であったと感銘している。

先生にご指導をいただいた数多い蝶の中でも一番思い出に残っているのは、岡山県の蝶友伊藤芳明氏から送られた標本の中に、偶然にもシルヴィアシジミ（カラーペーシジ参照）を発見した時の事である。私は当時この蝶を同定することができず、早速中原先生のところを持参すると先生は大いに驚かれ、「これは私が先年発見し新種として、*Zizera sylvia*と命名して外国の昆虫雑誌に発表した蝶である。その後再発見のしらせもなく日本では全く知る人もない幻の蝶かと思っていたが、やはり日本に棲息していたのだな」と感激され、私に和名を付して発表するようすすめられた。尚その際学名の由来として、夭折された先生のただ一人の愛嬢の名を取ったものであるから、和名をそれにちなんだものにしてほしいと話された。私も勿論先生のご意志に則して、シルヴィアシジミの和名と共に「ゼフィルス」誌に発表した。その後学名の方はシノニムとして消されたが、和名の方は今もそのまま残って先生の令嬢の名を記念していることは、先生も本望であられたことと信じている。

私が先生に献げる *nakaharara* の学名を付したのは、

ヒメキマダラヒカゲの伯耆大山産亜種が代表的なものであるが（「昆虫界」十巻）、この命名に当っては先生も私と同意見であられ、新亜種としての命名を積極的におすすめられた。その後この亜種名は、大山以外の関西各地産の個体と差異がないという理由から、シノニムとして抹消されている。特に故杉谷岩彦先生はこの亜種に関して深切なご意見を賜り、且先生の蒐められた全国各地の多数の標本を参考にご送付下さって再検討をすすめられた。然し当時中原先生も私も比較したのは関東各地の標本であって、（原型は関東北部産と解される。）命名当時関西産は偶々伯耆大山産の個体しか手許になかった為、大山産亜種と限定して発表したが、今日思えばヒメキマダラヒカゲは、関東型（原型）と関西各地産とは明瞭に別亜種とするに足る差異を備えており、上記新亜種名は関西型亜種（を代表する大山産）の特徴を指摘し関西型亜種に付された最初の命名として、現在も活かされてよいと信じている。

戦後の私は種々の事情から蝶の研究に遠ざかる時期が長く、中原先生にお目にかかる機会も殆どなくなっていたが、先生は本業であるがん研究の道でいよいよ業績を上げられ、遂に国立がんセンター総長という重要な地位にまで達せられた。その機会に一度お訪ねしたいと考えながら果せずにいるうち、今回の訃報に接することとな

り誠に残念でならない。

二月四日青山葬場で厳かに営まれたご葬儀に参列し、先生の残された偉大なる足跡をたたえる数多くの弔詞に接したが、それらは先生の公的な面における業績に関するものが大半で、そのお人柄につき深く触れるものが少なかったのは残念であった。先生の活動は国際的でその業績は海外でも一層評価されていると聞か、先生の愛妻ぶりも又国際人たるにふさわしく、我々の感覚をこえるものがあったのは事実である。それを物語る例をご紹介します。蝶に雌雄型というものがあって、その逸品は国立科学博物館に収められたナガサキアゲハ（雌は有尾型）であると思うが、異常型での絶品となると中原先生が、当時数少い原色写真入りで「ゼフィルス」六巻一・二号誌上に発表されたツマベニチョウの白化異常型が第一に挙げられるであろう。美麗蝶は見なれている筈の先生も、この標本は世の中で最も美しい蝶であると感じられたらしく、「江崎教授は Dorothy はギリシヤ語で『神の贈り物』の意であることを指摘された。この優婉にしてしかも豊雅な異常型こそ神の賜り物に非ずして何であろう。」という最大級の讃詞の下に、この型に対し *ab.dorotheae* と、愛妻の名をとって献げられているのである。誠に手放しのおのろけぶりはほほえましい限りである。

先生は海外生活で身につけられた合理主義の為か、あれだけ蝶を愛されながらこの道で遂に後継者の養成をされなかった。その為、結果的に唯一の弟子と思われる私が、身の不肖をも顧みず偉大なる先生を語る事となつて慙愧の念に耐えないが、先生ご逝去の機会に、あまり世に知られていない先生の人間の側面を記して、先生を偲ぶすがとしく拙い筆をとつた次第である。先生のご冥福を祈るや切である。

昭和五十一年三月二日

（弁護士・弁理士）

Ⅱやどりが85・86号より転載Ⅱ

研究室にうたふ

いづち行く道とは知らね行けどゆけど

飽かぬこのみち歩みつゞくる

和郎

# シルビアシジミ、そして中原先生

緒方正美

米山武志先生より中原和郎先生と関係の深いシルビアシジミの写真提供のご依頼をうけ、同好の仲間の厚意でここに用意することができた。(カラーページ参照)シルビアシジミは現在どのような日本産蝶類の図鑑にも掲載されているので、その形態、分布、生活史などについては説明する必要はないだろう。しかし「シルビア」が中原先生の記載された名で、しかもそれがご令嬢の名に因むということにふれているのは白水隆教授の標準原色図鑑全集第1巻蝶・蛾(保育社)だけである(P53)ので、ここにシルビアシジミの歴史ともいえるべきことをのべておきたい。

シルビアシジミは本州(関東以南)、四国、九州、南西諸島にすむ可憐なシジミチョウの一種で、同じような

地域に普通にいるヤマトシジミとは大へんよく似ていて、素人の目には勿論、蝶に興味をもつ人達でも注意して見ないと別種とは気づかないほどである。中原先生の慧眼はいち早くこの差異を見ぬき、1922年(大正11年)に伝統的な英国の昆虫雑誌 *Entomologist Vol. 55, No. 709* で「Two New Species of Far Eastern Rhopalocera」という報文(P123~124)を発表され、この中で、この蝶を *Zizera styvia* という新種として記載された。しかしこの報文が外国の雑誌に掲載されたものであったこと、及び報文の著者の住所が示すように、先生は当時すでに New York に住んでおられたことなどから、その後外国の二、三の文献に引用された(実物の検討はなく)以外、我国では遺憾ながら誰一人注目す

る人はなかった。かくしてこの蝶が我国の文献に初めてその名を現わすには約20年の歳月を要することとなる。

即ち1941年(昭和16年)12月に発行された蝶類同好会の機関誌「Zephyrus」第9巻第2号に掲載された成富安信氏の「蝶類雑記」と題する報文(P112~116)中に *Zizeria sylvia Nakahara* の新しい産地が報せられたのがそれである。もっともこの再発見は成富氏がヤマトシジミとは少しちがう標本をみつけ、当時蝶について指導を受けておられた中原先生にみせ、先生がそれを自分が新種として記載したものだと思われたので、先生による再発見ともいえよう。この報文において成富氏は和名として初めて「シルヴィアシジミ」を提唱され、この名が現在まで続くことになる。

つづいて1943年(昭和18年)5月発行の「Zephyrus」第9巻第3号に白水隆氏は「九州産シジミテフ科の數種に就いて(一新亜種の記載を含む)」という報文(P189~198)を発表したが、この中で、シルヴィアシジミは雄交尾器の形態からもヤマトシジミとは明らかに別種であるが、独立の種ではなく、台湾などから知られる *Zizina otis* タイワンコシジミの一亜種であること、食草もヤマトシジミとは異り、ミヤコグサらしいこと等を明らかにした。現在九州大学教授の白水氏は当時九州大学農学部昆虫学教室の江崎悌三教授の下で、蝶類の新

進研究者として研究を進めつつあった方だったので、この報文はシルヴィアシジミが日本産蝶類のリストに新しく加えられるべきシジミチョウであるという「お墨附」を与えたことになった。従ってその後同好者の目は一せいにこの蝶に注がれて、新産地が續々知られるようになり、生活史も明らかにされるに至った。

戦後になって1950年(昭和25年)7月発行の昆虫学評論第5巻第1号に白水氏は「日本産シルヴィアシジミの古記録とその亜種名」という報文(P22~26)を発表し、1881年 Montague Fenton が記載した *alope* が日本産シルヴィアシジミに一致することを考証し、従って *sylvia Nakahara* は *alope Fenton* の synonym として使用できないことを明らかにしたので、中原先生のご命名になる *sylvia* は国際動物命名規約の前には如何ともしがたく、残念ながらその名はリストから姿を消すことになってしまった。(その後亜種名はさらに検討されて、現在は *emelna De L'Orca* が採用されている。)しかし和名について白水氏は台湾産亜種につけられたタイワンコシジミや、古く宮島幹之助氏が用いたヒメシジミが不適當である理由をのべて、成富氏の提唱したシルヴィアシジミを用いるべきだとしたので、その後「ヴィ」が「ピ」におきかえられたが、現在「シルビアシジミ」が一般に使用されている。



なお *syria* (シルビア) は先生の夭折されたご令嬢のお名前と承るが、これを種名とされたことについて、私は何度か先生にお伺いしたい思いにかられたが、やはりどうも躰けにお尋ねすることはためらわれて、とうとうお聞きしないうちにしまった。シルビアシジミの名が出るとき、先生はどのようなお気持ちであられたらうか。長い年月の歩みはすべてを追憶の美しいヴェイルで包んでいたのだろうか。現在図鑑を見る読者は何故この蝶にシルビアシジミという和名がついているのか知る由もないということをお私はいかにも残念に思うが、これは一人の勝手な感傷にすぎぬのであろうか。シルビアという名にこめられた人間的なものを知ることまた人の心を豊かにする糧となるものを。

こうしてシルビアシジミについて書いていると中原先生のことがつぎつぎに思い浮ぶ。思えば私が中原先生の名を知ったのは中学生の頃からであった。昆虫好きの私は当時「昆虫界」とか「Zephyrus」とかに出てくる「中原和郎」という名を知ったのである。私の父は鳥取県出身だったので、中原先生のご父君が郷土出身の、我国で初めて冷蔵業をおこした先覚者だと知っていて、私に話してくれたから、私はお会いしたこともない先生に勝手に親近感を抱いていたのである。終戦直後私が京都大学医学部を卒業したときは勿論先生ががん研究の大家

であることを知っていた。しかし私が先生とお付合することになったのは医学の方面ではなく、昆虫の方面であった。私が先生と医学上のお話をしたのは、先生の少年時代からの昆虫関係の友人であられた江崎悌三九州大学教授のご病気のときだけである。江崎教授は私の中学の大先輩でもあったから、そのご病気のことを伺ったら、自ら組織標本を見られた結果をお知らせ下さったのである。

私は大学卒業後蝶蛾の好きな仲間のつくっていた日本鱗翅学会の世話をするようになったので、先生とご交際を願うようになった。あるときはがん学会会場で、あるいは旧癌研究所の所長室で、又あるときはご自宅で、あるいは蝶仲間との会合でというように度々お目にかかり、また文通も頻々とあった。今まで空想でしかなかった私の先生への親近感は現実と化したのである。この頃の先生はすでに長年力を入られた蝶のコレクションを国立科学博物館に寄贈されており、昆虫の方は少年時代熱中された脈翅類(カゲロウの仲間)の研究に再びとり組んでおられたので、私は自分が採集した脈翅類を次々と先生にお送りした。先生からそのお礼と思うが、手元に残しておられた南米産モルフォチョウの標本を頂いたこともあるし、私が自宅で採集したヒメカゲロウが新種だからと種名に私の名をつけて下さったこともある。このよ

うな思い出は限らないが、先生から何か指導を受けたことがあろうか。私の記憶に今も鮮かに残っていることは私が旧癌研究所所長室に先生をお訪ねしたとき、昆虫は全部自宅においてあって、そこで調べるのだといわれたことである。先生がそういうおつもりでいわれたかどうか分らないが、私は本職と趣味とは厳密に区別すべきであるとのご忠告であるように思った。私はこの教えに絶対に反しなかったと断言することができないのは誠に申し訳ないが、少くとも本職を疎かにしないように心掛けた。こういう気持ちがあつて先生が国立がんセンターでの激務につかれてからは昆虫のことで先生をお煩わししてはいけないと私は文通をひかえるようにしていたが、今となってはやはり残念な気がしてならない。

このような事柄一つ一つは私にとって大切な思い出だが、とりたてて多くの方々に申し上げような話とはいえない。それでは先生と私との関係は一体どのようなものだったのだろう。私をひきつける何物かが先生のお人柄にあったことは確かである。先生が亡くなられてから私は先生の少年時代の自伝「少年昆虫学者」（落第読本昭和30年）を読んだ。これを読むのはもう何度目か、よく覚えていないが、何度読んでもそこに感じられる少年昆虫学者中原和郎の昆虫研究に対する純粹な、ひたむきな熱情、若きエネルギーは私の心を強く打つものであつ

た。私はそこに自分も心に画きながら果せなかつた夢に似たものを見出し、私の弱さに比べて、先生の情熱の強さに羨望と尊敬の念をいだき、そして幾分かの共通点を見出して親しさを感じたのであろう。師弟ではなく、同輩では勿論ない。年令職業を超え、いつでも身近で、同じように昆虫のことを楽しく、気軽に話しあえる、頼りになる大先輩というのか、文では表現しがたい心のつながりがあつたように思う。もっともこれは私一人の勝手な思い上がりかも知れないが、それほど私は先生に傾倒していたといえよう。

私がかつて先生にお願いして書いて頂いた上記故江崎悌三教授追悼の文（「蝶と蛾」第9巻第1号P.3~4、1958年2月）は亡き友を偲ぶ先生の切々たるお気持ちにじみ出ている誠に美しい文であつたが、それは「江崎君と私の交遊には大きなエピソードは何もない。嘈嘈として急雨の如き大絃もなく、切々として私語の如き小絃もなかつたのだ。その静かなしらべには、しかし、余音嫋嫋として絶えざること縷の如きものがあつた。そして、その縷が今切れてしまったのである。淋しい」と結ばれていて、私は大へん感動した。先生と私の関係は勿論先生と江崎教授のそれに比すべくもないが、やはり大きなエピソードもないながら、私はいつでも先生と昆虫のお話ができるという安心感と満足感とを

もち、心のたよりとしていたのだ。このようなお付き合いを許された先生には何ともお礼の申しようもないが、この大切な先生と私とのつながりは今は切れてしまった。

私も又大へん淋しい。

(財団法人洪庵記念会  
産科婦人科 緒方病院長)

Waro Nakahara

The days drift past like smoke from an extinguished fire.

Seasons pass but his bones know it not:

Spring melts into summer; his easel is broken, his paintbrush dried up.

Summer withers into autumn; the butterflies no longer fear his net.

Autumn darkens into winter; his warm cape sleeps among mothballs.

His once cluttered desk looks empty and forlorn,

But his portrait smiles at the flowers before it.

Dorothy Nakahara

# 理研から国立がんセンターへ 中原先生とのおつきあい

武見太郎

私が中原和郎先生と知り合いになったのは理化学研究所であった。(昭和十二年頃) 中原先生は鈴木梅太郎研究室に在籍されていたし、私は仁科研究室に所属していた。私の研究室は鈴木研究室から特に犬飼文人君を招いて参加してもらい、一方電気学のほうで入江君を入れて三人で一部屋をつくっていた。犬飼君は中原先生の弟分であり、中原先生と共同研究していたので、中原先生もちょいちょい私の部屋をたずねられることがあった。原子物理学の仁科博士の研究室は、理論の人たちの中に湯川、朝永両博士をはじめ、多士済々の学者が研鑽を競っていた。また、実験のほうもすばらしいスタッフをもつ

ていたことは申すまでもない。応用的な面として生物学の分野では放射線生物学をはじめとして農業物理学あるいは医学などの人々が参加した。私は中性子の医学的応用という分野を与えられて、研究を進めていたのであった。そんな関係から鈴木梅太郎先生もときどき私の部屋にみえて、ご指導をいただいたことがあった。中原先生のもとに鶴上君という若い獣医出身の病理学者がいて、病理化学的な研究をしていた。当時の獣医学界ではめずらしい存在であった。これらの人々と物理畑の藤岡由夫君だの大ぜいの人々が一部屋に集まることがあった。その中で藤岡君が最も多弁であり、中原さんが彼にハーモニ

カという名をつけた。それは吹いても吸っても音が出るという意味であった。お互いに学問の真剣な討議のあげく、お茶を飲みながらたわいもない話をするというふうな雰囲気もあった。

中原先生は常に温厚で長者の趣があったけれども、ときに辛らつな皮肉を飛ばされることしばしばあった。それは相手の肺腑をつくものがあった。先生の学問における鋭さは、ちょいちょいそういうときにあらわれた。中原先生が常に主張されることは、正確な文献を批判的に読み、そして自分の考えをもつということであった。

犬飼君は直感的な鋭さをもっていたけれども、中原先生の場合は文献的にきちんとした体系をもち、それを批判する立場を常に失わないという方向であり、二人が議論しているのを聞いていると、私は第三者としてきわめて教えられるものが多かったことを記憶している。また、物理学的な考え方と生物科学的な考え方との違いや、接面についていろいろいる人が集まって議論することは、今日から考えてみると非常に有益なことであった。

仁科先生は私の指導者であったから、ほとんど毎日部屋に顔を出されたが、中原さんと話し合われることが多かった。ずっと後のことだが、大河内先生が戦犯で所長の席を去られ、仁科先生が所長になられたとき、中原先生を副所長に抜てきされた。このことはどう考えてみて

も私の部屋で仁科、中原両先生がしばしば顔を合わされたことが原因ではないかと思われる節々がたくさんあった。終戦後の破滅に瀕した理化学研究所を日本の科学の再建の場所として再建しようという熱意が期せずして仁科、中原両先生にあったことは、まことに幸福であったといわなければならない。そして、中原先生は単なる研究者だけではなく、すぐれた管理者であり、管理能力の上でもすばらしい存在であったことがわかった。しかし、それを見抜いていた仁科先生もまた偉大であったといわなければならない。仁科、中原のコンビによって新しい理研の生きる道は一方に物理学、一方に生物化学を両極として、その間にあらゆる科学を網羅していき、縦割りでない総合的な研究体制をつくらうということであった。お二人の計画は、建設的に実現しようとして、必ず金の面で苦勞しなければならぬことがあった。仁科、中原両先生が私に、吉田首相のところへ連れて行き何とか頼めということをいわれたことも何回かあったが、いつも仁科先生は中原先生と一緒に動かされた。その当時吉田首相はお二人の熱意に非常に動かされ、日本の再建は科学の再建から出発しなければならぬということとを非常に強く肝に銘じてあらゆる努力を惜しまれなかつた。

その当時のことであるが、東大医学部長であった田宮

猛雄博士が仁科博士を訪問して、薬学の緒方章教授の定年退職の後任として、中原先生をぜひ割愛してほしいという申し入れがしつこく行われた。仁科先生は非常に悩まれて私にその話をされたが、理研の再建にとって中原君をさくことはできないというので、ついに最後まで田宮先生の申し入れをがえんじなかった。後年私が田宮日本医師会長のもとで副会長をすることになったとき、田宮先生は、あのときもし中原先生が東大の教授になっていたら、東大の薬学もあり方が変わっていただろうというって嘆いていたのを聞いて、運命めぐりあわせがまことに奇であることを私は痛感した。また、中原さんは癌研に前から関係されていたので、その後がんの文献と歴史については先生の右に出る人はなかったと思う。私もよく科学史としてのがん研究の歴史の話を聞いたことがある。それは岩波新書で平易な形で後に出されている。中原先生が理研で研究されたのは、核酸関係のものが多かったと思う。そして、ことにビタミンLの構造を決定されたのは有名な話である。そのころ犬飼君や私どもで、ペントースヌクレオチッドを酵母から取ったり、豚の肝臓から取って放射能による白血球減少症を防止できるかどうかを研究していた時代があった。それを鈴木梅太郎先生が指でなめてみて、中原さんが研究されていたビタミンLと味が非常に近いというので、構造式のわか

っているペントースヌクレオチッドを出発点としてビタミンLの構造決定にこぎつけたことは、鈴木先生の示唆と中原さんの努力によるものであった。後年鈴木先生は腸の非常にひどい癒着によって、原因不明の病気で死亡されているが、それは何でもなめてみられるところから起きてきたものではないかと私は考えている。

国立がんセンターができるとき、当時の灘尾厚生大臣は巢鴨の癌研を統合してがんセンターをつくるつもりであったが、波澤敬三理事長から全員が不賛成でとうていそれはできないという最後の通達を受けて、非常にショックだったらしい。私はその相談を受け、日本医学会長であった田宮猛雄先生にご出馬を願ってがんセンターの総長になっていただいたときに、先生は直ちに、研究所長は中原さんでなければだめですなというて、私も直ちにそれに賛成したのであった。そして田宮・中原のコンビがで上がった次第である。

こんなことで、場所が変わったり時が移っても中原さんと私の交遊関係は非常に長く続いたといわなければならぬ。彼は蝶の収集家としても有名であった。これは若いときからのお仕事であったが、中原さんにとっては一つの道楽的な仕事であったと思う。しかし、それは道楽というよりは非常に専門家であったと思う。藤岡君の令息がまた蝶の収集家として有名になっているけれど

も、彼は本来エンジニアであり、慶応の工学部の教授をしているのであるが、これも中原さんの影響を受けたのではないかと私は考えている。

こういうふうに中原さんとの長いおつき合いを考えてみて、彼のようにがんひと筋に生き、そして生化学の領域を貫いた学者は非常に貴重な存在であったと思う。しかし、一方において学問上の指導についてはきわめて親

切であり、私はいろいろと教えられることが多かった。また、私の同僚の犬飼君も中原さんを非常に尊敬していた。中原さんは昭和期を代表するがん学界の至宝であったし、また後進を指導された点でも偉大な存在であったと思う。

(日本医師会会長)

### 研究室にうたふ

まがつ祇の国の奥がにわけ入りて探り出でたる香菓かくのみぞこれ

(トキソホルモン)



# 鼎談

## 中原和郎先生を偲んで

出席者（敬称略）

田宮 博

東京大学名誉教授

秋谷 七郎

東京大学名誉教授

樽谷 和男

国立がんセンター研究所

薬効試験 部 部長

司会 高谷 治

国立がんセンター病院

生理検査室 室長

司会 今日、がんの医学に偉大な業績を残された中原先生を偲んでというところで、貴重なお話をお聞かせいただけるものと思います。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

最初にまず田宮先生どうぞ……。

### 幸せな国際結婚

田宮 この鼎談で私が最初に発言するのは大変おこがましい次第ですけれども、うちを出てくる数分前に家内が中原さんの未亡人のドロシイさんを訪問して来て、いろいろ中原家と私ども夫婦の過去の交りについてあれこれ喋ったものから、それが頭にこびりついていますので、いわばイントロダクション的にその事を話すことをお許し願います。

私は一九二六年に大学を出て、二八年に結婚しているのですが、結婚してすぐ家内を連れて行ったのが今の中原さんのおうちなんです。その時に、彼ら夫婦か

ら *maijong* (麻雀) という遊びを教わったのが、妙に印象に残っています。アメリカ製のパイなので北にはノース、南にはサウスなどと書いてありました。

**秋谷** 何年のことだって。

**田宮** その前にも私は中原さんのうちには何度も行きましたけども、家内を初めて連れて行ったのは一九二八年でした。

**樽谷** その当時は、先生、目白のお宅でございますか。

**田宮** 今の家ではありませんけれども目白の駅に近い借家で中原家ですぐそばでしたからよく家内を連れて行きました。それ以来のことですから、もう五十年の交わりですね。

**樽谷** 昭和の初めですね。  
**田宮** 家内は日本人として



右側奥より 樽谷先生 司会高谷先生

左側奥より 田宮先生 秋谷先生 榎本事務局長

### 鼎談風景

は一番ドロシイさんに親しい人らしく、いろいろな個人的なことも話し合っているようです。ドロシイさんによりますと中原さんのご両親、特にお母さんは彼女に対して非常に理解があり、親切だったそうで、この点彼らの国際結婚は当時としては稀に見る幸福なものだったようです。

中原さん亡き後の近頃はさぞお淋しいことだろうと思っただけで家内はよくお訪ねするのですが、一週間に一回木曜日に英語のレッスンを家でしておられて、ときどき若い人達を集めてご飯を食べたり、お茶を飲んだりしておられるようです。そのほかたまには米国の婦人で日本人の奥さんになっている人とも会っておられるようですが、大体あまり社交的な方ではないようです。

**秋谷** この間新聞で見たら、ドロシイさんという人が『私の英語』とかいう本を書いたようなことが何かに出ていましたけれども、本当ですか。

**田宮** 私は知りません。

**秋谷** ドロシイさんと言ったらほかにないでしょう。新聞か何かに出ていましたよ。

**樽谷** 別じゃないでしょうか。

**田宮** ドロシイさんはあまり語学的なことに興味がないらしく、日本語もどうとう上手にはなりませんでした。

**樽谷** 余りお上手ではありません。

**秋谷** 本を書いたとしても、当然日本語と対照するんだから、違う人でしょうね。

**田宮** 皆さんもご存じでしょうが中原潔子さんという方がありましたね。あの人には中原さんの姉さんの妹さんなの。

**樽谷** 妹さんです。結婚して栗原さんというのですね。歌人です。

**田宮** 二人兄妹なんですね。

**樽谷** ですから、お妹さんとそのご主人と相次いでお亡くなりになってから姪御さんの孝子さんをひきとって一緒に暮しておられます。

**田宮** 私の家内が最近聞いたところでドロシイさんは今度孝子さんを戸籍上

養女にされたそうです。

**樽谷** 先生のお子さんが生きていたら、今五十歳位でしょうね、結婚したのが一九一八年ですから。どうして子供をつくらないんですかと冗談に喋ったことがあるのですけれども、あいの子はかわいそうだからつくらぬと言われていました。

**田宮** 私の思い違いかもしれないけれど、ドロシイさんは中原さんより一つ年上じゃないですか。

**樽谷** そうです。満八十ということですね。

### 生い立ちの素晴らしさ

**田宮** 話がドロシイさんのことばかりになって肝心の和郎さんのことから離れてしまいました。私にとってあの方は学問の上でも人格の上でも、本当にお手本のような人でした。初めてお会いした時私はまだ大学生でしたが、その時の印

象は今で言う誠にカッコウの良いスマー  
トそのものの人でした。

**司会** 中原先生はいつもノーブルなカッコウのいい先輩でいらっしやいましたけれども、ああいう生い立ちはどういうところから……。

**田宮** お父さんがミシガン大学に学ばれた方でしょう。それにお妹さんが立派な歌人と来ている。こんな素晴らしい雰囲気の家はそうあるものではないでしょう。『加仁』を見るとお父さんは何か当時としては新しい事業をなすっていたそうですね。

**樽谷** 今で言う冷凍食品ですね。その創始者なんです。だけど、時代が五十年後だったらよかったですね。当時は時代が違ったので事業に失敗なさって、それからお仕事はされなかったそうですね。

**秋谷** 中原先生のお父さんというのは相当年輩でしょう、それでいながら、当然明治の時代にミシガンまで行くんだというところに何か中原家という——何か

あったんでしょか。

**樽谷** 奥さんに伺っても、よくわからないんでね。

**田宮** 中原さんのお母さんも桜井女塾（女子学院の前身）というところで英語の教育を受けられたように伺いました。

**樽谷** だから、お父さん、お母さんともに英語ができるので、奥様が帰ってこられてもそういう意味の不自由はしなかった。

**秋谷** 先端をいくように、上品で、折り目正しいというか、そういうところがあるんでしょか。

## 折り目正しい ジェントルマン

**田宮** いわゆる洋行帰りのハイカラというようないや味なんかは全くなくてね、ちょっと珍しい方でしたね。

**秋谷** ピュアーであって、混り物がなというか……。あの歩き方、顔つき、態度、すべてが学者として又真の紳士でした。

**司会** ただ、今で言うカッコウのいいのとちょっと違ってます、非常に貴族的な感じがしましたね。

**田宮** 私の娘がまだ中学二、三年だった頃、「お前、どういうタイプの人の奥さんになりたいか」と聞いたたら、何のたぬらいいなしに「中原先生のような方」と答えました。そのことを中原さんに言ったら、いささか照れたような微笑をされました。

**樽谷** とにかく女の研究者と言わず、女の人に人気がありましたね。

**司会** 晩年に至るまで多くの人に人気がありましたね。

**田宮** ここであえて深入りはしませんけれども、そういうことに関してのドロシイさんの悩みも、家内は大分打ち明けられているんです。

**司会** と仰いますと、何か余りきちん

とし過ぎていてお辛いことができたんでしょか。

**田宮** いや、そうじゃない。

**秋谷** 中原先生というのはああいう折り目正しい人でしょう。しかもジェントルマンで女にもてる、それ自体がドロシイさんの方としては、どういふことないんだけれども……。そういうふうには解釈しますね。

**田宮** そういう人たちのある者がドロシイさんを見無視して……。

**司会** 若い方は必ずしも折り目正しくないですからね。

## 若き研究者の 育成に情熱

先生は人なつっこい感じを受けることがおありになりました。非常に親しげにしていたさまして、本当に気持ちいい思い出しかないのです。研究所でも皆



田宮先生

さんそうなんでしょうか。

**樽谷** 要するに、先生と僕は親子ほど違うもんですから、余り仕事の上でどうこうということではなくて、むしろ親父に甘えているような面がありますね。わりあい先生というのは年齢差をお考えになりませんか。だから、若い連中とでも同じ年みたいな感じで相対で議論をなされた、ああいう点非常にお若かった。

**秋谷** 若い人を大事にしましたね、若い人を育てていくんだと。

**樽谷** 理研（理化学研究所）なんかの時もそうなんですけれども、動物飼育し

ている夜間高枚へ行っているような子供とでも相対でお話をして——一見取りつきにくいんですけれどもお話していると友達みたいになってしまふ。

**司会** 威張っているという感覚は、全然我々に与えられなかったですね。

**田宮** さすがの私も彼とワイ談だけはしませんでした。そんなことをさせない貴族的なものが彼には具わっていません。そういう点では彼には一種の冷厳な垣根のようなものがありましたね。

**樽谷** 酒を飲んでも酔っぱらわないから、ワイ談するわけにもいきませんか。そういう羽目を外すという感じはありませんでしたね。ですから、さめているといふか、上品な冗談は言うけれども、余り落ちませんね。

**田宮** 縄のれんのおでん屋に行つて、おネエさん、一杯というような調子で一緒に飲みたくなるような雰囲気はなかったね。

**樽谷** ああいう点は薬学の落合先生（故落合英二東京大学名誉教授）のフラ

ンクさと違って……。それは生涯を通じて変わっていませんでした。

## 理研の初仕事 日本酒の研究

**田宮** これは悪口みたいで恐縮なんですけれども、私の家内に言わせますとドロシイさんとの交わりは親しいものには違いないが、何となく水の交わりのようなところがあると云うのです。

**樽谷** ドロシイさんというのはあいう方だから、僕なんかも理研にいた時も全然先生のお宅へ伺ったことはないですね。最近お会いしているいろいろお話を伺うと、少女みたいな感じのする方で、非常に純粋な方ですね。

**秋谷** 中原さんは理研には何年位おられたのですか。大分長かったです。

**樽谷** 大正十四年帰国早々、伝研（伝染病研究所・現医科学研究所）と理研の

囑託となりかけ持ちでした。理研ではその後昭和二十五年迄居られました。理研での最初の仕事は日本酒の発がん性についてだったそうです。鈴木梅太郎先生が合成酒をおつくりになったでしょう。いわゆる普通の日本酒はフーゼル油など毒成分がある。日本人に胃がんが多いのは日本酒のせいではないのか調べるというのでラットにお酒を飲ませてみたそうです。

中原先生が外国人の奥さんをお連れになって帰ってこられて、日本人同士の結婚より金がかかるから、二ヶ所から給料をもらって生活ができるようにしたということを奥様が書いて居られます。

**秋谷** ちょっと鈴木梅太郎先生と長興又郎先生は似たところがあると思う。人柄から言って。非常に子分をかわいがって、一つのアイデアを出しては子分を使って一緒に仕事をするという、なかなか包容力のある人でしたね。

田宮君、あなたのお兄さんが伝研の所長になったのはいつでしたかな。

**田宮** 僕はいつ頃だったか憶えていません。兄貴は私より十四年上でしたから、中原さんはちょうど真中でした。七つずつ違う。

**秋谷** 宮川米次さんがやって、その後位がおたくの兄さんじゃないかな。

**田宮** 宮川さんは中原さんをそんなに好きじゃなかった。兄貴は、そのことを怒っていましたよ。

**秋谷** 全然肌が違う。片方はクリニクで何かちょっと辛らつなというか、しんがなかった人でした。

### 楽しかった中原会

**田宮** 話を少し学問のことに向けましょう。いつか中原さんががん組織にはカタラーゼが少ないことを見つけたことがあります。私はそのころカタラーゼの作用機構の研究をやっていたもんですから、中原さんから「田宮君、カタラーゼには一体どういう生理的な意義がある

のか」と言う質問を受けました。カタラーゼは元来過酸化水素を水と酸素分子に分解するものとして知られて来ましたが、その頃発見された事で、過酸化水素の濃度の低い時には、カタラーゼはペルオキシダーゼの作用をするということがありました。つまり過酸化水素から酸素分子を遊離するのではなくて他の何らかの物質を酸化するというのです。いずれにしましてもそれが動物の体内でどんな生理学的な役割りを演じているのかは全くわかっていませんとお答えしたことがありました。

**司会** 理研時代は榎谷先生、ご一緒だったんですか。

**榎谷** はい、昭和二十四年から二十六年までで、当時癌研が木挽町の南胃腸病院跡に移り下に病院があって、三階の継ぎ足した部分に研究所がありました。先生は主に理研で仕事をしておられました。それで昭和二十六年に大塚の焼跡に復興されてから癌研の専任になられて移

僕は今でも覚えていゝるんですけれど、二十年前なんですけど、理研で中原研究室にお世話になりました、中原先生のお弟子さんの鶴上先生（故鶴上三郎千葉大学教授）という人についてなんです。だから僕は先生の孫弟子になるわけです。ちょうど秋谷先生が仰ったように、中原先生はトキノホルモンの仕事をしておられました。その時に、月に一回ずつ

中原会といつていろいろな分野のトップレベルの先生をお招きして、飲みながら先生方のお話を伺うということがありました。それで田宮博先生、田宮猛雄先生（故初代国立がんセンター総長）、秋谷先生、それに落合先生、朝比奈先生（故朝比奈泰彦東京大学名誉教授）など、それぞれいろいろなお話をしていたで、あの時の話というのは非常に——僕ら若輩じゃ傍にも寄れないような先生方がいろいろな仕事の上でのことをお話し下さったので、随分勉強になりましたですね。中原先生はホストで、いろいろ話を引き出して下さって、田宮先生からはカ

タラーゼでしようかね。最初はカタラーゼだったですね。秋谷先生の時には裁判化学のお話を中心で、結局当時の下山事件が話題の中心になりました。いろいろな話をお聞きしました。

### 癌研の復興に活躍

**秋谷** それで思い出したんだけど、

いろいろあつて夜いつも帰るのが一時頃になる。それで自転車に乗って、後に竹のザルをくくり付けて、ヘルメット、カバン、巻き脚絆でやって来たんです。国電大塚のガードの所まで来たら、あそこ

いたわけです。またもう一つ思い出すこととは、あの時に患者がいたわけです。それを、あんな戦争下でいながら非常に統制とれてナースがそれぞれ患者を立派に保護したという話が残っている。それを思い出しながらよくあそこを越えたもんなのです。この間もあそこいろいろなお世話になったのですけれども、あそこというものでかなり先生やっておられたんでしょう。

**樽谷** いま壊しましたけれども、軍艦みたいなかつこうをした癌研究所が昭和九年にできて、長興先生が癌研究会の会頭をしていらっしやいまして、そこで中原先生が病理の主任となり仕事をなさっていました。ですからその当時は理研と癌研とをかけ持ちでした。

**秋谷** よくあれだけ造ったと思いましたがね。まるで灰になったんですから、あれ。

**樽谷** 癌研究会も昭和二十年に一時業務を中止し、戦後の復興に全力をあげたのですね。



**秋谷** 吉田富三君が来たのはずっと後ですか。

**樽谷** 吉田先生は、中原先生が国立がんセンターにお移りになってから癌研の所長になりました。

**秋谷** それで黒川君（黒川利雄癌研究会付属病院名誉院長）が来たりして…。

**樽谷** 吉田先生が見えてから黒川先生が見えられました。

## ユニークな人生航路

**司会** 話は少し戻りますが、中原先生がアメリカへ渡られた動機というのは何かあったんですか。

**樽谷** 中原先生から伺ったのでは、中学校を出てから一高を受けたら滑っちゃったんです。その当時既に蝶々の収集で論文を幾つか中学生の時書いていたので。それで、俺を入れてくれないならアメリカへ行くというのでアメリカへ渡ったんです。当時はシアトルかサンフラン

シスコ——西海岸に着きまして、それから大陸横断鉄道に乗ってニューヨーク、向こうまで行かれたという話です。

**秋谷** それでは誰も頼る人はいなかったんですね。ただお父さんの紹介があったんですね。

**樽谷** それだけだったと思います。

**司会** 本当に勇気が要ることですね。

**樽谷** 水が変わって大陸横断鉄道の中でお腹をこわして、黒人のポーターに慰められたなんという話もしていらっしました。

**田宮** お父さんやお母さんがどういう方だったということは今度初めて伺ったんですが、息子を自費でアメリカに留学させるというからには相当な資産家でもあったんでしょうね。

**樽谷** 島根からお出になったんですね。資産家でしたけれど、お父さんが事業に失敗されてお金を無くされたということを奥様から聞きました。戦争前ですから、アメリカへ渡るとするのはそう安い金でなくて、なかなか理研や癌研のお

給料だけじゃ渡米するだけの費用にはならないから、一回しか行かれなかった。今とは雲泥の差でしょう、当時の外国行きということは。

**司会** 一高に落ちたからすつと行くという気も……。

**秋谷** 彼の気概ですよ。あれは彼の大きな事件の一つですね。しかし、僕にはちょっとそこまではなりませんね。

**司会** 今の時代じゃ、ちょっと理解できませんが、確かに明治の気骨といえますか……。

**樽谷** 松村松年先生だったかな、動物学の先生と文通しておられたらしいですね。中学の時に。それで、たまたまお会いになったことがあるらしいのですね。お会いになったら、小倉の袴の中学生がこのこ行かれたらしいんです。そうしたら、中原と言うのはお前か、こんな小さいのかと言われたって先生が言っておられました。

**田宮** 松村先生は北海道大学の昆虫の先生で「千虫図鑑」という大型の本を書

かれた方ですね。中原さんは若い頃に蝶の新種を幾つも発表しているのでしょう。

司会 そうです。

樽谷 そういう点ではちょっと早熟なんでしょうかね。一高受けて、落ちたらアメリカへ行くわと言って行けたのは、その辺ででしょうかね。

田宮 人生の進み方が若い時から相当ユニークだったのですね。

## 憧れの的

### ロックフェラー研究所

司会 先生はちよくちよくアメリカへ行れたのですか。

樽谷 いや、行きません。アメリカへ行くのがいやでいやで、ヒューストン（国際がん学会）へ行かれただけです、私の知っている限りでは。とにかく昭和二十四年以来、海外にお出になったとい

うのはそれだけです。

田宮 彼がアメリカへ行って、われわれにとっては憧れの的だったロックフェラーで研究をして来たと聞いて、アメリカの話聞き出そうとすると、彼の言うことは大部分アメリカの悪口でした。アメリカの学界にひどい派閥があったり、人種的な偏見が根強いということなどでした。その後日米関係の歴史を書いた本を見ますと、あの頃中国人や日本人に対する手厳しい差別待遇の法律が次々と出していたのです。

司会 研究費をただある目的のための成果を上げるという形で出しちゃいかぬのだと、そういうことをアメリカがやっているからいかぬとか、そういうようなことを言っておられましたね。

樽谷 やっぱり研究というのは自分が好きじゃなくてはできないので、自分の楽しみであるはずなんだから、それはそれ以上のことを言うなどということなんでしょうね。

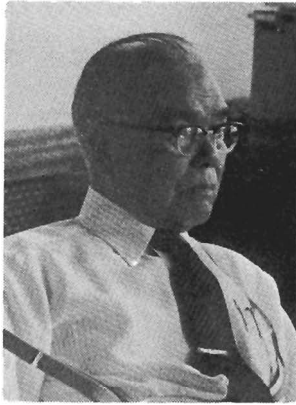
田宮 ロックフェラー研究所は、創立

の最初の頃にはずいぶん外国人を入れていたんですね。大勢が決まった頃に野口英世が入りましたが、中原さんが入られたのはそれよりも大分後のことでしょう。

## 想い出の共著

話が違いますが私には中原さんとの共著が一つあるんですよ。日本学士院の英文紀要第四卷（一九二八年）に“Cytochrome in tumor tissues”と題して出した論文で、著者は矢追秀武、田宮博、中原和郎の三人になっています。（この矢追さん《東京大学名誉教授》も七年前に亡くなりました。淋しいことです）

ご存知のようにチトクローム（英語読みではサイトクローム）というのは、一九二五年にイギリスのケイリンという人が見出ししました酵素の一種で、動物、植物の如何を問わず好気性の細胞には必ず含まれているヘモグロビン系の含鉄呼吸



秋谷先生

酔素で、日本ではまだ大学院生だった若僧の私が最初に研究を始めたものでした。それが腫瘍組織にも含まれているかどうか調べて見ようということで、当時中原さんが培養しておられた種々の腫瘍組織（ニワトリのラウス・ザルコーマ、

ラットのフレクスナー・ジョブリング・カルチノーマ、其の他）について私が観察したわけです。大体どれにもチトクロームの存在は認められましたが、特に嫌気的な性質の強いと言われていたラウスのザルコーマには殆んど或は全く無いという結果が出ました。これは当時としてはちょっと注目を引いた知見だったよう

です。

秋谷さん、戦後いつの頃でしたか、東大の薬学部へ中原さんを教授として招くという話があり、私に意見を聞かれたことがありましたね。

秋谷 そうそう、そんなことがあったね。大体東大の薬学科（後に医学部から独立して薬学部）は伝統的に有機化学一辺倒だったのだが、ペニシリンなどが出るようになってから、もっと医学、生物学の方面の人も入れなければならぬと言うので中原さんに白羽の矢を立てたのだ。

田宮 中原さんがどんな理由で薬学科へ行かれなかったのか憶えていませんが、今考えれば行かれなかった方がよかったですよね。

秋谷 とにかく自分で思ったことを貫きますから、あるところへいくと中原君というのは、いわゆる明治時代の人だから右顧左眄しませんからね。こうと信じたら突っ走って行く。

樽谷 強情我慢の一筋でしたね。やっ

ぱりあれが明治の気骨でしょうね。

### 若き日の酒・たばこ

秋谷 昔、随分田宮君の徳研（徳川生物学研究所）には行ったね、夜。あなたがいるので押しかけて、中原君だの落合君だの……。

田宮 徳研の私の部屋には必ずウイスキーの瓶が置いてあり夕方五時頃になるとチビチビと始めたものでした。ウイスキーと言えば、若い時の中原さんはウイスキー党でしたが、いつか会って「この頃お酒の方はどうですか」と聞いたら、「やっぱり年のせいでしょうかね、近頃は日本酒のうまさが増えて来て、その方をやっていますよ」とのことでした。

秋谷 いつ頃かな。

田宮 大分前のことで、いつだったかちょっと思い出せません。それから又大分たって「もう到頭酒が一滴も飲めなくなりましてよ」と言われて大変淋しくな

りました。

**秋谷** 酒で思い出すのは、理研の中原君の部屋だったかな、あなたとか坂口謹一郎（東京大学名誉教授）、落合、それから東北大へ行った藤原、飲んでぐでぐでんに酔って……。

**樽谷** 中原先生がですか。

**秋谷** 中原君は相当強くて、私は酔ったのを見たことがない。それで坂口君なんかへとへとなっちゃって、僕は飲めないから後始末だ。あの頃が一番飲んで、それからやめたらしいな。ぱっとやめたね。どうだって言ったら、やめたよ酒は体によくないと言っていたね。たばこ酒は随分飲んでいましたよ。

**田宮** 私が若かった頃の医学部の連中の集まりという芸者が必ずいて、その三味線の伴奏で、連中が安来節なんか歌って踊ったりして賑やかなもんだった。僕の友人には医学部の連中が多かったが、僕のいた理学部には、そんなことをする粹な（と言っては褒め過ぎでしょう）奴、むしろ下品と言うべきでしょう）奴

はいなかったね。

**秋谷** クリニックの連中だけじゃないかな、医学部だって。

**田宮** そんな事を突然言い出したのは、もしそういうふうな場所に中原さんがいたら、何をしたらろうか、とふと思っただけです。

**秋谷** 行かないな。

**樽谷** 先生は酒を飲んでも酔っぱらわ



樽谷先生

ないでしょう。歌を歌うわけでもない。先生、何が面白いんですか、宴会したって先生何をやっているんでしょうかというお話をしたことがあるんですが、ただ飲んでいただけです。飲んで陽気になるわけでもない。

**田宮** 私の兄なんかは私よりはちょっと医学部的・道楽者的で結構お座敷が勤められた。

**秋谷** 手品だろう。中原君は、随分飲んだって何にも芸がない。ただ飲んでいただけですよ。

**樽谷** 自分の生涯で、お酒の失敗は二度あると言われましたね。

**田宮** そんなことあったんですか。

**樽谷** あったんだそうです、お若い時に。それだけだよと言っておられました。とにかく強かったですね。

たばこで面白い話があるんです。伝研で矢追先生とお二人でラウス肉腫にウイルスがあるのなのというお仕事をしていた時に、お二人ともお若い頃で、どちらか先に来た方がたばこをつけるんです。それで、帰るまでどちらかが必らず吸っていて、たばこの火を絶やさなかったそうです。

**秋谷** なにしるのんだね。

**樽谷** ですから、戦後の理研時代にはお酒は少なくなりましたけれども、たば

こはよくお吸いになっていました。真っ白な髪の毛の前の部分だけがいつも黄色でしたね。先生よくそうやってくわえたばこで仕事ができますねと言ったらいや、矢追君と二人でこうやったんだという前の話をされました。たばこはよく吸われましたね。

**田宮** 矢追さんもよくたばこを吸っていましたね。

**樽谷** ですから、お二人ともお若かったから、朝から一本のたばこの火が最後のお帰りになるまでつなげた。

**秋谷** 僕は矢追さんと中原君との間がそうだったなんて全然知らなかった。

**樽谷** 僕は知らないのですけれども、聞き伝てによりますとゲームごと、さっきの田宮先生のマジシャンじゃないけれども、強いんだそうです。だから、ブリッジがものすごく強いんだそうです、聞き伝てで本当のことはちょっとわかりませんけれども。

**田宮** それは私には初耳です。

**樽谷** 本当ですかと言ったら、先生笑

っていらっしゃいましたけど。

## ハイカラな目白のお宅

**田宮** 中原さんのおうちは私どもが山の手線の目白駅へ出る道（近道）の途中であって、しょっ中その前を通るのですが、お庭に椿の木がたくさんあり、花の頃にはそれが見事に咲いています。中原さんがまだご健在の頃でも、おうちはいつもシーンとしていました。隣に二瓶とみさん（昭和初期より中原家にいたお手伝さん）のうちがあり、時々家内は会うのですが、これがドロシイさんにとつては何かと頼りになっている人らしいです。

**樽谷** 庭続きで来られるものですか、とみさんのうちと先生のところとべルを付けたんです。ですから奥様は必要な時にそのベルを押すとみさんが向こうから来てくれる。だから一人でいても、ちょっと何かあってもすぐ呼べるか

ら安心だと言っておられました。とみさんが買い物係ですからね。椿は奥様が好きなんですね。最初はあのうちをお買いになった時には、あそこの庭はテニスコートにしていました。

**田宮** そんなに面積がありましたかね。

**樽谷** 意外にあるんです。初めテニスコートを持ったおうちに住まわれたという人は、そう数はないんじゃないでしょうか。

**田宮** あのうちを建てたのは私の一高での二、三年先輩の土浦亀城という人で、私の以前の目白の家（戦災で焼けてしまいました）もこの人に建ててもらいました。

**樽谷** あのうちへお伺いすると日本人のうちじゃないんですね。

**田宮** 私ども夫婦が初めて訪問した時、それはまだわれわれが外国へ行く前のことでしたが、大変ハイカラなうちだなどと思ったことでした。

**秋谷** 僕は薬学部に教授として引っ張



司会 高谷先生

## 理想的な研究環境

**司会** そういえば、「がん」という雑誌を充実させたのは中原先生のご功績ですね。

**樽谷** 「がん」というのは、いわゆる日本がん学会の雑誌で、山極先生が創刊された雑誌です。最初日本語の雑誌だったのですが、「がん」が国際的に通用するものにならなければならぬというので昭和二十三、四年頃に欧文誌に完全に切りかわった。日本語を一切なくして、エディター・イン・チーフを中原先生がやられて、英語まで直された。それで、がん研究の人口もふえて、また国際的にも評価を受けるようになった。今では相当数出ているでしょう。

ってこようと思って何遍も伺った時には、どうも今のお宅とは違う。記憶になり。すぐ玄関入ると蝶の標本が並んでたんです。緒方章さんが辞めた時だから、昭和二十三年ですか。

**樽谷** そして三十年代になってその蝶のコレクションを科学博物館へ寄贈された。

**秋谷** それまで、これは私のハズバンドのホビーだとか言って、きれいに並んだのが玄関入るとすぐありましたよ。それで初めて知った。

**秋谷** これで思い残すことはないと思原君が言った時の一つとして、私と田宮先生がそろって薬学部へ来なさいと言っても行かなかったのがよかったと、こう

いうことも言っていましたね。行っていたら、全然今までの仕事ができなかったと、そう言っていました。

**田宮** 日本の学問の世界では理想的とも言える環境で一生を送れた人ですね。

自分の幸福は長與又郎と鈴木梅太郎という二人の偉いボスを持たれたこと、両方も私に学問専一にやらしてくるような立場に置いてくれたことだと言っていました。

そういえば中原さんは生涯一度も「教壇」というものに立ちませんでしたね。西洋の学者の中には、いわゆる「教授」という「教える商売」を軽蔑して、研究

一途に徹するのが学者のとるべき途だと考えている人が少くありません。バーナード・ショウの有名な言葉に“Those

who can, do; those who can't, teach.”というのがありますが、これは右の意味にとることが出来ます。人を

訓育するということが尊い仕事であることは勿論のことですが、日進月歩の学問の第一線に立っている人には、まだ余り

知識のない人々に初歩的なことを教える気持ちが始まらないのは当然でしょう。中原さんはそういう人だったと思いますし、教える商売をしなくて済んだ彼はほんとに幸福だったと思います。

**樽谷** そうですね。僕らに対してでも、お年をとられて六十、七十になられても長與先生、鈴木先生のことを懐しうにしていろいろな当時のお話をよくされましたですね。本当に尊敬しておられた。

**秋谷** 現役時代の面影が躍如として残っていますからね。恩を忘れないというのか……。

それからもう一つ、人間は定年なんかあるもんじゃない、定年なんというのは——やれる間は試験管握りながら、動物いじりながら死ぬのが学者の本命であり、本望である。

**田宮** 中原さんの置かれた環境がそういう言葉を許したんですよ。

**秋谷** そういう環境をつくったんだ。また、ご自分が思うとおり、設計どおり

実現できた。あの人の言うとおりになった。そこにあの人のパワーと人格というか、があってああなったんです。

**樽谷** 話は変わりますが、中原先生は、先生方が東大薬学部に来る様お呼びになったときに、ファイナルには自分先生になれない、なりたくないと言われたのですか。

**秋谷** 結局、勉強ができない、仕事ができない。

**樽谷** 何かそういう下地があったんですかね。

**秋谷** 何か勉強過程に共通的なものじゃないですか。教えて教えられるものじゃない。

**田宮** 私の交友範囲を見ても大体教えるのが好きだという人にはつまらないのが多いね。

**司会** 今は学生運動もありますしね。

**秋谷** あなたみたいにガバメンタルの方にいる人はいいですよ。私なんかまだほかに経営のこともありますからね。

**樽谷** 中原先生は、やっぱり自分で勝

ち取ったのかもしれないけれども、要するに自分の思ったとおりの生きざまをなさったという感じがいたします。

**田宮** 偉かったに違いはないが、非常に幸運でもありましたよ。

**秋谷** いや、恵まれたのか、恵まれるような下地をつくったのか……。

**樽谷** そう考えましても、研究できる場所というのは当時帝国大学以外には理研位しかありませんものね。あと、いわゆる研究所らしきものはないし、とすればやはり恵まれていたんでしょうね。

**田宮** 西欧人に似た所もあったが、明治的な大和魂がありましたね。大の皇室崇拜で。

**司会** 近頃確かに大和魂と言う様なものを持っている人がなくなりましたね。

## 総長になっても 研究に没頭

**秋谷** 自分が総長になる時のいきさつ

を聞いたんです。ラボラトリーの方へ行ったら僕はこれであとが悔まれないようになんできたし、これで安心しておられるんだけれども、何といても研究というものから離れることだけはいやだからお店をつくって……、しかしこれでなすべきことは全部終わったと言っていましたね。研究所の中も全部整理できたし、とほろりとしながら話していました。ここまできてもちゃんとしたところとところは、やっぱりあの人のきちんとしたところですね。

**田宮** あの人は研究意欲が強かったから自分でできたんだけれども、普通の人なら研究を止めちゃって総長専業になりましたよ。いわゆる armchair scientist に。ちょっと余談になりますが、私が中原さんを通じて知り合いになった人に久留さん（故久留勝第三代国立がんセンター総長）という人物があります。人づき合いが余り良くないので友だちが少なかったようだったが、中原さんとは妙にうまく合ったようですね。

**司会** 中原先生は久留先生と気がお合いになりましたけれど、久留先生という方はシビアで、本当に立派な先生でした。

**田宮** 若かった塚本さん（塚本憲甫第四代国立がんセンター総長）も亡くなりましたしね。

**樽谷** 中原先生としても、癌研時代にご一緒された方が先に逝かれたと、それは寂しいことだったと思います。

### 格調高いゲートの訳詩

**田宮** 中原さんの告別式の際に、テープに吹き込まれた彼の声が放送され、その中にゲートいわく、という言葉が出てきましたね。あれは私にとっては初耳でした。（本文12頁6行参照）

**司会** 何ですか、ゲートいわく、というの。

**樽谷** ゲートのファストの森鷗外の訳詩がうまくないというので、ご自分で韻

をふんだ訳を付けられて、それを昨年のがん学会の特別講演の時も話の最後に入られたのです。

**田宮** あれは非常にいい言葉でしたね。

**司会** 私は教えられたことはないんですけれども、お話はわりとお上手でしたね。いろいろコンファレンスなんかでお話をされると絶対人にをそらさないでやっておられましたですね。

**樽谷** 先生のお話というのは論語と同じで理路整然としているんです。だから、だれが読んでもわかるような論文をお書きになる。あれはマーフィー先生に教わったんでしょうか、それを非常にたたき込まれたんですね。ロックフェラー時代に。だから、同僚のアメリカ人よりもお前の英語の論文の方が確かだということとをマーフィー先生に言われたと言っておられたですね。

**秋谷** ああ、言っていましたね。田宮猛雄先生もよく英語で書きましたけれども、あいつのところを持っていくと必ず



直される、しかしよく直すなあと思わざるを得なかった、やっぱり違うと言っていました。全く外人式な言葉になっていらしたらしいですね。

**田宮** 英語に関してですけども、前に話が出ましたように、ドロシイさんは、随分長い間アメリカへ行ってられない、彼女の話では近頃の英字新聞には彼女にとって意味の解らない言葉がたくさん出てくるそうです。これはわれわれも同様で、しばらく日本を離れていて帰って来ると日本の新聞にいろいろ意味のわからない新語が出てきますね。

## 巨星墮つ

**司会** 総長には随分前になるべきだと言われていたのですけれども、お断わりになり続けていたみたいですね。

**秋谷** ええ、言っていましたよ、あんなものやったら、せっかくのこの自分の一生涯かけた方針が台なしになっちゃう

から、俺はやめるんだと。

**田宮** 私も、もしも彼から相談受けたらなると言いましたでしょうね。

**司会** 最後になられて、かえってそれがどうも過労になったようですけども……。

**田宮** やっぱり命を消耗するでしょう、あんなことやっていたら。

**司会** そうですね、慣れないことを急にですからね。

**樽谷** 奥様とか姪御さんには話していらしたそうですけれども、去年の暮れあたりから今年は退官してフリーランサーになって、週に二回とか三回行って仕事をするんだ、行き帰りをどうしようか、俺はバスと電車で行くからいいなどと言っておられたそうです。仕事だけを楽しんでに続けたらというふう言っておられたましたね。

**秋谷** あの先生が心筋硬塞があるとは夢にも思わなかった。前からあったんでしょうかね。死の直接の原因は硬塞なんですよ。

**司会** そうです。

**田宮** 執務中か何か、突然亡くなられたのですか。

**司会** いや、亡くなられた時はそうですが、その前に、私ちょうどアメリカへ行っていなかったのですが、一月三日にご自宅でちょっとおかしいということでご緊急入院なさって、それで入院なさってからも少々痛まれたり、吐かれたりしておられたのですけれども、その後非常に調子がよくなったと言っておられた矢先に最後のアタックが来たということでしょうかね。その前はおありにならなかったですか。

**樽谷** と思いますけれども……。

**司会** 前立腺の何かでご入院になったというのは、あれは結局がんでなかったのですかね。

**樽谷** なかったのです。前立腺肥大で、医科歯科大学の落合先生が手術をなさった。あの時もおかしいんですけど、入院前に油汗流しておられながら、強情

我慢で最後の最後まで我慢しておられたですね。要するに、強情我慢の方ですね。だから、痛いとか苦しいとか、そういうことは一切言われなかつたです。

秋谷 やっぱ偉大な巨星でしたね。

樽谷 先生はいつも現職で死にたくないと言っておられたんです。例えば久留先生、塚本先生、田宮猛雄先生、皆さんそうでしたから、リタイヤしてからにするんだと言っいらっしゃいました。

## 何しろ突然だったんだ!!

司会 先生の最期のお言葉は、「何しろ突然だったんだ!」そう言っておられました。私が最後にお看取りせざるを得ないことになりました。と言うのは、医長が順番に総長のための当直していたんです。総長にもしもの事があつたらいい奴というので。私はアメリカに行つていたものですから、一遍もお前はやつていないからやれと、そういう事になりまし

てその晩、しかも二、三日前から非常に状況はいいから泊まらなくてもいい、連絡さえつけられるようにしておけばいいからということだったんですが、ふつとその日カルテを見ましたら、わずかですが普段の熱よりちょっと上がつておられて、もしかしたら風邪でもおひきになつてこれから熱でも出るかもしれない、そういう時に泊まつていないと大変だからと思ひまして泊まつたのです。そうしたら夜中に急に起こされて、私が駆けつけた時に一言「何しろ突然だったんだ!」

突然何が起きたのかと伺つたら、もう次からお返事がないんです。脈は乱れていて、どうしようもない状態であつたらしい。確かにあの言葉には万感がこもつていたのだと僕は思つたんです。あれは奥さんに早く知らせるべきだという一つの言いわけに突然だったんだと仰つたのかもしれないし、本当はゆつくり療養して辞めてからにしようと思つたのに突然やられたのだと、こういうお

話かもしれないし、何しろその時に非常に強く仰られたんです、何しろ突然きたんだ、というふうには。

田宮 現職でなくなつたのは彼にとつてむしろ幸福なことだったのでではないですか。

司会 もうちょっといていただきたかつたんですがね……。本当に早過ぎて残念なことだと思ひます。

どうもお忙しいところ、きょうはありがとうございます。

(了)

(注) 本文35頁下段15行目、中学の時、松村

松年先生とお会いしたとあるのは、松村先生とは既に蝶の発表論文のことで文通があり、初めてお会いしたのは、故飯島魁東京帝国大学教授でした。お詫びして訂正致します。(樽谷)

## 瑞泉寺

菅野晴夫

その頃の癌研では年に一回、研究所全員の日帰り遠足があった。全員と言ってもこじんまりとした世帯であったから適当な数である。その年は鎌倉の瑞泉寺に行くことになった。昭和三十三、四年頃であつたらう。季節は晩春だった様に思えるがはつきり思い出せない。元氣のよい人々は北鎌倉の駅で降りて建長寺より尾根歩き—今の鎌倉アルプス—をして瑞泉寺に降りる。足の弱い者は鎌倉駅から直接に瑞泉寺に行くという計画である。中原先生は後の方であつた。私も後の方であつた。東京駅で皆が横須賀線に乗込む。やがて電車は発車した。中原先生は楽しそうに窓外に眼をやられたり、何やら読んだりして居られるらしい。皆も互に静かに話をしている。そ

の頃私の属していた東大の病理の遠足と言うものは乗物に乗るなり酒が出てワイワイ騒ぐものとばかり思っていたので、この雰囲気はまったく珍しかった。鎌倉に着いて、先を歩いて居られる先生は手に小さい文庫本を持って居られた。「金槐和歌集」であつた。私は実朝の歌の中では「もののふの矢なみつくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原」が最も好きであつたので、忽ち興味を覚え、先生は実朝の歌の中で何が一番好きですか、とお尋ねした。「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪の寄る見ゆ」とポツンとただそれだけをつぶやく様に仰つた。鎌倉への遠足の持ち物として実朝の歌集はこの上なく先生にふさわしいものの様に思われた。先生

は佐々木信綱先生に師事されていた優れた歌人であることなどその時の私は全く知らなかった。

瑞泉寺に着いてみると、蒼蒼とした木立の中に在る寺との予想に反して周囲が開けていて明るい寺であった。木々もそんなに多くなく瑞泉寺という名にふさわしくない様な気がして少しばかり不満であった。そのうちに山廻りのグループが到着して急に賑やかになった。先生は一寸左肩の上った特徴的な歩き方でゆっくり庭を散歩されて木を眺めたり山を眺めたりされていた。そのうち木の名前をあれこれ話をして居られるのが聞えて来た。あれはマグノリアですね。そうだね、マグノリアだ。と先生と大橋さんの声である。マグノリアとは泰山木のことらしい。瑞泉寺だから泰山木の方が好ましいのにと思ったりした。

中原先生に最初にお目にかかったのは、というより拝見したのは確か昭和二十二年の冬、「癌研究の管見」という題の先生の講演会であった。管見とはどういうことかと興味を覚えたし、ゆくゆくはがんの研究をやってみたいと思っていた私は同級生の一人を誘って一号館の大きい講義室に行ってみた。さぞかし満員聴衆で一杯だろうと思ってみるとガランと大きいす暗い講堂には五、六人の人影がまばらにみえるだけで部屋には火の気もない。先生はオーバーを着られたまま、話を始めら

れた。足下をみるとゴム長をはいて居られる。二、三日  
前、雪が降ってまだ残っていたのである。がんの研究は  
広い領域であってとても話の出来るものではない。今日  
は私が興味を持って研究をしていることを話そうと思う  
のだが、それは管の穴からがんの一部を眺めた話であ  
る。だから管見という題をつけたのである、と仰ってト  
キソホルモンの話をされた。お話は面白かったのだけれ  
ど当時の私は医学部の一年生でがんの形態の概略を講義  
できた程度であって先生のお話の真の面白さを理解す  
ることは到底無理であった。それより何よりも足下から  
寒さが這い上って来て耐え難かった。お話は一時間位で  
終わったように思う。髪を短く刈り上げた日本人離れし  
た中原先生の端正なお顔とゆったりした態度、そしてト  
キソホルモンという聞いたことのないがん細胞が出して  
いる物質、新しい世界がそこに開いていることをおぼろ  
げに感じた。杉村さんも、小野さんも少数の聴衆の中に  
居られたそうである。そのことを知ったのは二十年も後  
のことである。私達は暗い雪の夜道を下宿に帰った。

(癌研究会癌研究所長)

# 中原先生の思い出

小野哲生

大塚の癌研究所に中原先生のもとで実験をするようになったのは、昭和二十九年の九月からであった。大学卒業後すぐに癌研に入った大学の同窓の遠藤氏（現九大癌研教授）の抽出したトキソホルモンに核酸のあることを分析して、理科学研究所の研究室におられた中原先生に報告する機会があったのが縁になって、新潟大学に学位論文を提出すると癌研にとっていただいた。そんな縁で採用していただいたのでトキソホルモンの仕事をお手伝いすることとしたが、これは決して中原先生から命令さ

れたわけではなかった。逆にトキソホルモンの仕事をしたいと申し上げると「数学でも物理でも何をやってもいいんだよ」と言われてびっくりしたものだ。これは研究にはオリジナリテイが大切で、自分の真似をしてもしょうがないという先生の気持を伝えられたものと後から思い当たった次第である。その後も中原先生は研究は弟子の自主性に任せられることが多いようであった。これが私は別として先生のもとでがん研究を始めた者が、それぞれ独特の境地を開いて世に認められるようになった由

縁であると思っている。

その後、遠藤氏はすぐに独逸に留学に出たが、私の少し前に癌研に来ていた杉村氏（現国立がんセンター研究所長）と毎日遅くまで実験し、楽しい思い出となっている。この頃、中原先生が文部省のがん研究班をもっておられたが、癌研であったその班会議に出席せず、杉村氏と他の会合に出掛けてしまった時には、先生も我々のがんに対する不熱心をなげかれ、がん研究の将来を託することが出来るかと大変不満であったと聞いて慙愧の念にかられた。

遠藤について杉村、直良（現メルボルン在住）の諸氏がアメリカ留学で出た留守を守っていたが、遠藤氏が三年で帰ってくると、私も昭和三十四年から米国に留学することとなった。私の留学の最後の年（三年目）に国立がんセンターが発足し、中原先生が癌研究所の大部分の研究員をつれて移られた。私は中原先生は恐ろしくがんセンターと癌研を兼任されるものと安易に考えて帰国してみると癌研は辞めておられた。先生は早速帝国ホテルに我々弟子を集めて私の帰国を祝っていたいたのは忘れられない。帰国早々の時や、その後がんセンターに新しい部門が出来るたびに何度も私にがんセンターにくることを促されたが、先生の愛情をこめて育てられた癌研究所をもちたてるのが私の任務と考え、心苦しくも先生の

意に背き続けてしまった。実際先生の癌研に対する愛着は並々ならぬものがあり、終始一貫して癌研の存続発展にご援助いただいてそのご厚情は身にしみて忘れられない。

私は癌研究所の生化学を守ることが先生との約束のように考え、それを口実にがんセンターにも移らなかつたが、縁があつて昨年（昭和五十年）東京都臨床医学総合研究所に移る話もちあがつた。中原先生におそるおそるご了解をいただきに伺つたのは、昨年の十一月頃ご病気になる数ヶ月前であつた。その時あるいはおしかりを受けるものと覚悟していたのに、思いも掛けず私のために大変喜んで励ましをいただき、ほんと安堵すると共に不肖の弟子に対しての思いやりの程感涙にむせんだ。

その後先生は急に病を発し入院され、お見舞も遠慮しているうち突然他界され、かえすがえすも残念であつた。それでもご在命中に癌研を去って新しい職場に移ることをお耳に入れ、ご了解いただけたので、やっと救われる思いである。このような先生とのかかわりを考えると、私の自分勝手な振舞の多かつたこと先生に心配の掛けどうしであつたことが悔まれて、この思い出の記もそれに對する言訳だけに終つたようで情けない思いがしてならない。

（東京都臨床医学総合研究所生化学部長）

# 中原先生の思い出

遠藤英也

私が、当時（昭和二十三年）東大の医学部長であった田宮猛雄先生の紹介状を携えて、初めて中原先生を訪れたのは、たしか、卒業を数ヶ月後にひかえた四年生の終りの頃であったと思う。当時、先生は理研の一号館の三階の小部屋で、福岡文子さんとお二人でトキソホルモンの仕事をなさっておられた。別に確固とした信念があったわけでもなく、ただ何とはなく、人のやらないがんなの研究でもやるうかというのが動機といえれば動機の様なのであったので歯切れのよからう筈がなく、先生は何とたよりない男が弟子入りを希望して来たものだとお考えになられた様であった。もっとも、私の方は、いわゆる

一目ぼれというやつで、それまでのふらふらしていた気持ちが吹きとんで、この先生について行こうと決心したことであった。とまれ、過度の緊張のせいも、しきりと煙草をすい、灰皿と思って灰をおとしていたその器の真中に穴があいて「遠藤君、それは灰皿ではないよ、君」と先生に叱られるまで気がつかなかったほどであった。先生は「医学部を卒業したということは研究者としては何も知らないというのと同じことで、何かしっかりした武器を身につける必要がある。僕が紹介状を書くから、東大の薬学の落合君のところまで有機化学を勉強し給え。それはすぐには役に立たないかもしれないが、将来、必

ず役に立つ」と言われた。この予言どおり、落合先生のところで身についた有機化学の知識は、その後、二十数年を経て、現在私共のやっているがんの予防に関する実験的研究に大変有効にフィードバックされていることを思う時、先生の慧眼にあらためて脱帽最敬礼せざるをえない。

先生を当世風に一言で言うなら、私の知る限り、もともと「カッコ」のいい方であった。先生の研究に対する旺盛せる覇気、純粹且つ真摯な態度は、言うまでもないが、端麗な容姿、凜としておかしがたい気品をはじめとし、諸事万端に対する考え方、対処のなさり方、一挙手一投足に至るまで、凡てにわたって例外ではなかった。私ごとくに下賤のせい、最も古い弟子でありながら、先生に接する時は常に、ある種の緊張感を覚えるのを如何ともしがたかった。とまれ、「先生、今晚焼とりで一杯どうですか」という様な具合には、とてもいかなかった。色々な会議や討論に於ける先生の発言は、きわめて単純明快、事の本質をみきわめ、逡巡することなく、単刀直入にズバリと意見を述べられるのが常であった。時には、あんなこと言っていないのかなと、そばにいる我々弟子どもが、むしろはらはらする様なことさえあった。にも拘らず、先生が常に多くの学者から敬愛され、親しまれた所以のものは、一に、先生の公平で高潔なお人柄

によるものであろう。事実、先生の発言には、一切裏がなく、権力者にありがちな、権謀術策など微塵もなかった。

先生は我々弟子には大変寛容であられた。我々は、皆年恰好も同じないしは数年若い年令の、しかもどういひき目にみても、ガラのよいとは言えない連中ばかりであったし、それが、血気盛んな二十代の半ばから三十代の半ばにかけての十年間を大塚の癌研で過したのだから、よく言えば若きエネルギーでは切れんばかりの状態、悪く言うとも梁山泊もかくやの感があった。従って、いろんなエピソードもあるし、随分と勝手気儘なこともやったものである。夕暮時ともなると、我々は大概一風呂あびて、延々とピンポンにうち興ずるのが日課で、為に、化学も病理も、大体カラッポになるのが常であった。しかし、先生はついぞ一言もそれに文句を言われたことはなかった。大体、我々の仲間では先生に叱責されたものなどいらないではなからうか。もっとも小生は一度だけ、こっぴどく叱られたことがある。あれはたしか、独逸から帰国して半年ぐらいたった頃だったと思う。当時、鬱々として、楽しまなかった小生は、何かの学会の帰途、気分転換をかね、無断で九州旅行をした。その頃、年恰好が同じ位の、××大学の講師や、○○大学の助教授といった男の蒸発が新聞紙上にぎわわしていた頃とて、先





昭和14、15年、癌研病理部にて 左より中原和郎 故長與又郎癌研会頭  
故森和雄博士とともに (久松充氏提供)

生は大層心配しておられたということを後で聞かされたが、のんびり帰ったところを早速、先生に呼びつけられ、大声で「遠藤君、君は entspannen しているぞ」とどなられ、ちぢみあがったことを覚えていた。

研究に関して、先生は我々に、これをやれとか、あれをやれとかいう様なことを一切、いわれなかった。つまりテーマという様なものは全然なかったのである。この一見、放任主義とも言える方針は、ある意味では、かえって弟子どもにとっては大変なことであった。というのは、新人りの当座、我々にとっては、何をどうとりあげて、どう解析すべきか皆目、見当もつかなかったからである。従って、随分と変な実験をした記憶がある。今考えると、少くとも私に関する限り、実にむだの多い、効率の悪い試行錯誤の時間が長かった様に思う。しかし、このことが結局研究者に不可欠の、独立不羈の精神、洞察力、創造性の涵養に、あずかって大きな力があつたものと思っており、私も、教室員諸君に対して基本的には同じ路線を踏襲している。とまれ、我々弟子どもにとつて、先生ご自身が率先して実験をなさっているそのお姿が無言の教訓であり、大きな刺戟であつたことを終生忘れることは出来ない。

私は又、先生のおそばにいる間、雑用とか研究費の心配を一切した記憶がない。このことは、今、教室員をか

かえる立場になってみて、如何に大変なことであったかと思わずにはいられない。

今、目を閉じて、當時を回想すると、後から後からといろいろなことが思い出される。そう、こんなこともあった。先生が所長室で私の論文をみて、校正をしておられた時のことである。あまりの悪文に辟易された為か、気分転換に、ちょっと座をはずされたそうであるが、その直後に、大音響と共に所長室の天井の壁がはがれおち、先生の坐っておられた椅子は見るも無残にうちくだかれたことがあった。若しも先生が座をはずしておられなかったらと一同、魂の氷る思いがした次第であったが、これも悪文の効用と言うべきか。

先生は、晩年には酒も煙草もやめられてしまったが、私の脳裏に焼きついているのは、やはり、今にも灰が落ちそうになった煙草をくわえて、マウスをいじっておられる先生である。酒は、少くとも私が癌研に入った頃の先生は滅法お強く、とても小生の比ではなかった。癌研が未だ大塚に移る前、銀座の附属病院の屋根裏の仮住で、忘年会に理研酒で、すき焼きか何かを肴に、うんと飲んだことがある。皆、真赤になっているのに、先生はいくらのんでも、顔にも出ず平然としておられた。「一体、先生はよっぱらって、くずれたことがあるんですか」とたずねたら、一度だけ腰がぬけてたてなかつたことがあ

るとのことであった。とにかく、お強いのにびっくりしたことがある。

先生は、はじめ国立がんセンターに移られる意志は全くなく、あくまで癌研で研究をするんだと言っておられた。ただ財団法人である癌研の将来性については、かねがね経済的な理由から按じておられ、自分の弟子は出来たら、国立大学におくりこみ度いと申されていた。従って、昭和三十六年、私の九大教授就任が決った時、誰よりも喜んで下さったのは先生であった。ただ、私は、當時を回顧して、先生の許を去る限りないさびしさと、新天地を開拓する希望のミックスした複雑な心境で赴任したことを今でも昨日のこの様に思い出す。私が赴任して間もなく、先生は私の為にわざわざ九大を訪問され、挨拶をかね、学内で講演をして戴いた。私にとっては、あの腰の重い先生がはるばる九州まで来て下さったことだけで無上の喜びであった。当時の学部長が先生の来福に對しお礼を申し上げると、先生は、「長女の嫁入りの様なものですから」と言っておられた。先生は、その後、田宮総長の三顧の礼もだし難く、がんセンターに移られ、がんセンターの今日の隆盛に多大の貢献をなされたことは衆知のところである。早いもので私が九州に行つてから、はや十五年の歳月が流れた。この十五年間、私の上京の折の楽しみは先生を訪れ、先生の聲咳に接す

ることであつたが、何時、行つても先生は昔と変わらず、実験をされていたし、私をあたたく迎えて下さつた。

我々弟子どもは、先生の庇護のもとに成長し、はじめからおわりまで迷惑のかけっぱなしであつた感が深い、たった一つ、ご恩返しの様なことをしたことがあつた。それは、小野君、杉村君と共にまとめた Springer 社出版の 4NQO モノグラフを先生に献呈したことであつた。本が出来上つてきて間もなく、帝国ホテルに先生と落合先生をお招きし、執筆分担の方々と共に会食をもち、その席で本を差上げたが、両先生とも大層喜ばれ、我々一同、心から、よいことをしたと思つた次第である。

#### 研究室にうたふ

老の將に到らむ知らにきほひつゝいそしむ時にわが生命いのちあり

和郎

私は、プライベートにも、いろいろ先生にお世話になつた。私の結婚にも先生ご夫妻にご媒酌の勞をとつて戴いたし、また、長男の誕生にあたっては、和郎の和と、英也の也をとつて和也と命名して戴き、愚息の成長ぶりをいつも氣にかけ、楽しみにして下さつた。

先生は、卒然と逝かれてしまつた。人の世の定めとは言え、あまりにも悲しいことである。しかし、この悲しみをのりこえ、少しでもよい仕事をすることが在天の先生に報いる唯一の道であろうと驚馬に鞭打っている今日この頃である。

(九州大学教授)

# 中原先生と私とのある繋がり

馬場 恒男

一番初め私が中原先生のお顔を拝見したのは、確か、昭和二十七年頃のある夕刻の事である。以前から（学生時代から）がんの研究に関心のあった私は、中原先生のアゾ色素発がんに対する牛肝粉食餌の抑制効果のご業績とか、トキソホルモンのご研究とかで、お名前は存じ上げて、ひそかに憧れの対象としていた。その夕刻とは、即ち、田宮猛雄先生の何かの記念（賞をお受けになった記念）の夕食会が虎の門共済会館で行なわれた時であった。私は当時、伝研の組織培養室に出入りしていたので誘われてこの会に出席させて戴いたのであった。その席で、あまりにも日本人離れした白髪の高貴公子が上席に居

られ、そしてご挨拶をなさったので一体あれは誰か？と同僚に聞いて、初めて中原先生があなたの方だという事を知った。その時には、まさか、後年、私の如きものが、あの貴公子中原先生と親しくお話が出来たり、一緒に研究所に置いて戴けるとは思ってもいなかった。これが一番最初私が見た中原先生であった。夕食会の話が出たので、もう一つ、夕食をご一緒にした時の忘れられない思い出を挙げておかねばならない。

それは、私が癌研（単鴨）に採用されて翌年位（昭和二十九年頃）の癌学会の時である。この年の癌学会は京都であった。私共若僧（杉村、小野、遠藤、梅田、田中

(良)、高山等)は百万遍の近くのお寺に宿をとった。中原先生、福岡先生は都ホテルであった。そして学会第二日目の夕食は、皆で中原先生におごって戴いてホテルで会食することになった。皆でぞろぞろ定刻頃ホテルに先生をお訪ねしたが、先生はすでにホテルのダイニングルームの、奥まった或るテーブルの中央に坐っておられた。上記の若い連中は、皆スバシッコイ人達ばかりで、私が愚ず愚ずしている間に先生の真前の椅子だけ空けて坐ってしまった。ついに私が先生と顔を合せるはめになつてしまった。何しろ、田舎出の小生にとって、(又、当時は戦後の荒廃の中でやっと日本が立ち直りつつあった時代なので、若輩にとってホテルなどという豪華な建物など全く無縁であった)は、要するに目を見はるばかり、ついグズグズしてしまったものらしい。もとより中原先生は米国仕込みでいらっしゃるし、極めてご機嫌良く、食事と会話を楽しんでいらっしゃる。私にとって、フルコースの食事などというのは聞いたことはあつても、経験した事はないし、しかも先生の目の前ではあつたらいいのか、全く何を食べているのか味もなければ、話も耳に入らなかつた。ただむやみやたらとどこかで汗が出ているのがわかつた。その中に順が進んで、ボーイが、魚のフライを配つていった。「ハタ」と私は困

つた。箸を持たせてくれれば、こんなもの、屁でもないのだが、(元々小生は骨のある魚は、昔小さい時に骨が喉にひっかかった事があって以来苦手としていた)フォークとナイフを手にした時、いやな予感だったのであつた。果せるかな、遂に魚骨が口の中に入ってしまった。口の中に残つたこの魚の骨はどの様に処置したらいいのだろうか? 先生の目の前で、指を口の中に突っ込む訳にもいかないし、舌で上手にあやして、そつと出そうとしても、どうしても骨は意地悪く、奥へ奥へと入つていってしまう。周りの皆は平気な顔して、表面上愉快そうな顔して、先生のお話に合槌を打っている。遂に意を決した。思い切って、骨を飲み込んでしまった。アア、よくも無事に、我が食道は骨を通してくれたものよ。途中一〜二個所、一寸骨がつつかつたように感じた時、小生の顔面は明らかに蒼白化した事、出ていた汗も一べんに冷たくなつてしまつた事が、今でもありありと思ひ出されるのである。ホテルを出て帰途この事を一寸話したら、杉村君などは、もう永久に忘れられない好個の話題とばかり、その後、事々にこの話を出した。先日中原先生の納骨式の後、中原夫人に面白おかしく当時の模様を、modified English で説明しているのである。

中原先生は、一般の人々が思っているよりも遙かに、

明治時代の気骨のある大和魂を持つ日本人であった。この証拠(?)を二つ述べてみよう。

私共、巢鴨の癌研では、毎日のように昼食時先生を囲んで、種々と研究の事、世間の事、をたわいなく話合っていて、その中で先生のお人柄、お考えにそれとなく接していた。又、先生もそれを楽しんでおられた様である。

ある日の事、大橋君が「今アメリカで一番足りないもの、欲しているものは何でしょう？」と先生に伺った。間髪を入れずに、私が出すぎた口を出して、「それはBrainだよ」と言ったら、先生は、非常に顔を輝かせて、「That's right! 全く然り」と大きい声で合槌を打って下さった。私としては、考えもせずつい口から出ってしまったので、余計な口出しをした! という感が強く、一瞬後悔した矢先だっただけに、その嬉しさは数倍のものであった。先生の本心は、決してアメリカの連中に負けるものかという秘められたファイトの一生であられたように拝察される。

もう一つの話題がある。これも同じ昼食時の事であるが、多分、将棋の話ではなかったか? 三田村先生は将棋の名人であったと先生が思い出しておられた。小生も将棋は好きな方なので、あれは面白い戦ですよ! 何しろ、歩兵が敵陣に入ると金になるのですから! 戦争はよろしく、将棋の如く上手に兵を使わなければだめだ!

といった話が続いた。つい私は、中原先生なので気を許してしまつたらしい。「大体、第二次大戦の日本軍の戦は、全く惜しい事をしてしまったものだ! あのハワイの米国太平洋艦隊を全滅させた時、何故もう一踏張りして、米大平洋岸に敵前上陸を敢行しなかったのか、日本の陸軍軍人は敵陣に入れば歩兵が金になるのに、あんな南方の小さな島に、ちりぢりに分散して、食うものもない処で戦争させるなんて、どう考えても、いい作戦ではなかったのではないか?」と。もとより軍事専門家でもない私の、しかも過去に対する無責任な論評であったが、中原先生は、驚ろくなかれ、全く同じお考えであつたらしく、「そうだよ、全くそうだよ、馬場君の言う事が、私も全く賛成だね!」と仰言られたのには、こちらがびっくりした。それ迄、先生はお立場がお立場だったので(奥様がアメリカ婦人で戦時中それはそれは言語に絶した苦勞をされた筈です)戦争中の事は、話をひかえておいでであつたらしい。それが驚ろいた事には、上記の様な私の口をすべらせた事柄に非常に共感をされて、その後、何回か、私の顔を見ると、「馬場君、ハワイ攻撃の時、日本は惜しかったね! 折角のチャンスをも、全く日本は惜しい事をしたね」と仰言っておられた。勿論、先生も私も一つの戦術としての可能性を口に出したまでで、決して戦争を「礼讃」したのではない事は当然

である。しかし、先生のお人柄の奥にあるものが、大和魂を持った明治のお人であることは察せられようか。

平家物語から樗牛の美文調のお好きな点も実は、私とかなりの共通点である。

最後に先生の可愛らしい「ズルさ」にも一寸触れておこう。私としては忘れられない点だから。癌研（巢鴨）の三階の図書室に於ての事である。お茶を飲みにお出になった先生に、私は J.N.C.I. に出していた Sanford.

の論文をお見せした。それは、mouse の fibroblast を長い間ガラス管の内で培養していると、自然に transformation してがん化したという論文である。その当時、先生は発がんという事を、何か一定の化学反応と結びつけて明らかにしようとしておられた。4NQO の SH<sub>2</sub> 群との反応等を一生懸命に研究されていた頃である。「馬場君、こんな話は、私は信用しないよ。こんなバカな話があるかい。もし、こんな何もしないのに細胞がん化が起るなら、もう私はがんの研究などはやっても仕様がなからやめるよ」と強く仰言った。「でも先生、こんな事はやはりあってもいいのではないですか？」と申し上げると、「うそだよ、そんな論文は！ きっと、何かの手違いだよ、本当なら、私はもう研究をやめるよ」と、又、仰言った。その後、先生は国立がんセンターにお移りになってから、この事に関して、一度も

私の前で comment は仰せられなかった。

私にとっては、何と言っても一番魅力ある、かけがえない先生であった。

（九州大学教授）

鶯

鶯の來啼くしきけば今さらにかへり來まさぬ  
母しこほしも

（母逝きましましそのかみ庭に鶯歌多かりし）

和郎

# 卓越した管理者

——隠された一面——

林 弘

池田首相が喉頭がんで仆れ、国民の間がんと対策強化の世論が沸騰した頃、厚生省の機関紙「厚生」の成人病予防週間特集号に、斯界の最高権威による特集が企画され、研究面に中原先生が選ばれました。早速築地のむさくるしい研究室に原稿執筆依頼に参上したのが初めての出会いです。先生は気難かしい顔で応待され、俗っぽいものを書くことは国民をまどわすことになるかと主張されましたが、さんざん粘って口述筆記の形でしぶしぶお引き受け戴きました。厚生技官がお願いすれば即座にOKされる経験しか持ち合せていなかった小生にとって、先生に対する第一印象は、大学者特有の世間知らずの頑固

おやじという感じでした。

昭和四十八年十一月、国立がんセンターに配置替えになったとき、あの面倒な研究所長のお守りは骨が折れるわいと思っただけです。がんセンターには五十年七月まで在籍し、とくに四十九年六月以降は総長としてお仕えしたわけですが、接触を重ねるにつれ八年前の印象は完全に誤っており、先生は優れた学者であるだけでなく、円満な常識をもった立派な管理者でもあることを知らされました。

四十九年六月七日、塚本総長を継いで総長事務代理に就かれたとき、「自分としては研究所長以外の仕事をす



る気は全くなかったのだが、厚生省から曲り角に来てい  
るがんセンターの将来のために暫くの間その管理を引き  
受けるように頼まれたので、研究を続けてもよいこと  
を条件として引受けることとした。がんセンターは三部  
門制だから、各部門のことは病院長、研究所長、運営部  
長が一切責任をもって管理して欲しい。例えば筋を通さ  
ない総長への直接の話などは一切受け付けない」といわ  
れました。学究一筋の人と考えられていた中原先生か  
ら、このような適切な言葉が出たことは驚異でしたが、  
先生が戦前から戦後にかけて理研や癌研時代にその運営  
に尽くされた手腕と情熱を後に第三者から聞かされ、人  
は見かけによらないものであり、この総長によって十有  
余年たったがんセンターの積弊が著しく是正されるだ  
ろうと痛感した次第です。また近年とくに厳しくなっ  
てきた定員管理や経営管理の面でも常にがんセンターの将  
来を見越して大所高所からポイントを指摘されたこと  
は、第五代総長としてがんセンターの歴史に重要な業績  
を残した優れた管理者であったことを物語るものです。

一番困ったのは、四十九年秋先生が学士院会員に選ば  
れた時のことです。これは学者として極めて高い評価で  
あり、厚生省の在職者では最初の荣誉です。当然病院か  
らも研究所からもお祝いの行事をしたいという声が強ま  
り、素早くお膳立てしないのは運営部の怠慢だと鋭く攻

撃されました。ところが私利私欲の全くない中原先生は  
記念行事等は一切まかりならぬといわれます。弱り切っ  
た訳ですが、石川院長、杉村所長とさんざん思案し、有  
志の気持を洋画の形にまとめてお祝いの記念にしようと  
いうことになりましたが、これを受け取って戴く了承を  
とりつけるために、遠隔地の総長分室まで十回以上足を  
運ばなければなりませんでした。

最も嬉しかったのは五十年年度予算復活の時です。「研  
究こそ生がいがい」を口ぐせにしていた先生にとって、理  
想的な研究所を建築することが悲願でした。研究所では  
先生の学識を募って集った研究陣により、すでに世界最  
高水準の研究業績を挙げてはいるが、その建物は昭和四  
十年海軍兵学寮として建てられたもので、研究環境は劣悪  
千万です。しかし研究所の建築より先にまず当時建築中  
の病院を完成させなければならなかったのです。五十年  
度予算復活折衝の際、病院建築等の予算が極めて難行し  
ていました。関係筋への陳情に総長自身が出向くのと代  
理としては重みが違います。中原先生は総長就任でさえ捺  
拶まわりを一切やらなかった方ですから、恐らく聞いて  
戴けないだろうと思いいながら陳情に出向いて下さるよう  
伺ってみたところ、簡単に快諾され、間髪を入れず不自  
由な足で関係筋を廻って下さいました。そのお蔭で病院  
建築の予算が所期の額だけ確保されたうえ、近い将来研

究所建築の構想を練るための準備委員会設置の機運が高まる結果にもなったわけで、総長としての時宜を把握する非凡なセンスを見せつけられ、頼もしく感じた次第です。

紹介したい想い出はまだ沢山ありますが、中原先生の

意を体して、がんが結核のようにこわい病気からこわくない病気になる日が早く到来することを願ひ、そのためにがんセンター病院について研究所が一刻も早く完成することを期待して止みません。

(厚生省近畿地方医務局長)

## 春 日

雲雀あがる長き春日を何もせずいこひてしがなと思ひけるかも

和郎

## 中原先生とフロンティア精神

永田親義

がん研究の歴史に偉大な足跡を残して中原先生が逝かれて早や一年近くになる。当時は先生のことをなるべく考えないことよって痛みまでの悲しみから逃れようとつとめていた自分を想い出す。しかし、現在ではむしろ先生の在りし日を追憶することにいしれぬ心の躍動を覚える。これは、物事の最大の解決者である「時」による忘却のしわざでは決してない。むしろ、現実の歴史化の中で、より高く止揚された境地で先生を憶うことが可能になったからである。そして、現在私が先生への追憶の中に感得するものは、一つの偉大な精神とその顕現者

としての先生への新たな思慕と心底からの共鳴である。そこには私にとって限らない喜びと勇気の泉がある。「われわれが歴史から得るところの最上のものはそれがひき起こす感激である」というゲーテの言葉の真実さを今改めて思う。

中原先生に私が初めてお会いしたのは、昭和三十七年六月であった。当時、京大工学部で量子化学の立場から発がん機構の研究を進めていた私が、新設の国立がんセンター研究所へ移ることになり、一度研究所を見ておくようにという先生のお薦めに従って上京した時である。

福井教授につれられてがんセンターへ伺った時、病院玄関に出迎えて下さった先生が、懐しく抱くようにして握手された時の手のぬくもりは今も忘れられない。学会で遠くから拝見したり、あるいは又、私の発表に質問されてそれに答えるという形でしか接する機会がなかった私にとって、直接先生にお会いできることは大きな喜びであった。その年の二月に業務を開始していた病院に半年おかれて、七月から発足する予定の研究所の創設に先生は忙殺されていた時である。国立のがん研究所を初めて作るという大きな仕事であり、先生は確かにお忙しかつたはずであるが、お会いしてそのような「忙しさ」を全く感じとることができないことに私は不思議な思いをした。しかも、その後十三年余り、私は先生が忙しそうにされているのを一度も見ることができなかった。いつ拝見しても先生は悠揚迫らず、そしてゆっくりと歩かれた。突然部屋にお訪ねしても、実験中でない限りいつも机を離れて話相手をして下され、それは時に一時間にも及ぶことがあった。話題は研究の具体的な話の外に、がん研究の在り方、生物科学の未来像など多彩であった。このようにして先生から話を伺うことは私にとって最も楽しいことの一つであった。がん研究史に不朽の名をとどめるような業績が、どうしてあのような悠然さの中から生まれたのだろうか。我々凡人に多い無駄が、先生に

あつては極度に少なかった為であろうか。それは又、マイペースを崩さず、それを貫き通す先生の強烈な個性の故でもあっただろう。がんセンター研究所の創設も、まさに先生のこの強烈な個性に基く一つの線の上に進められていることを、お会いした最初の日に私は感じとることができた。

昭和三十七年の春頃だったか、福井教授から、今度国立がんセンターができ、研究所長として中原先生が移られるらしいとの話を伺って私の心は躍った。中原先生の下で発がん機構の研究ができればどんなにか素晴らしいだろうという想いは、がんの問題に深く入り込むにしたがって次第に強く私の心を支配していたからであった。中原先生が所長になるということだけで、その研究所は私にとって最も魅力のあるものと思えた。管轄が厚生省か文部省かというようなことは全く頭になかった。とにかく、中原先生が所長である研究所は立派なものになるに違いないと信じた。実際、少数精鋭主義といわれた癌研究所の活発さがそれを実証していた。中原先生と福井教授との間で話が進み、私の為に新しく一つの部を作って戴くという思いがけない好条件で移ることになり、私は少々戸惑った。先生の下で研究できるという事が私の最大の願望であったし、ポストについてはなにも考えていなかったからである。その上、部の名称、構想、人事

などすべて委すといわれてその深い信頼に私は感激した。福井教授と相談して量子化学と有機反応の二研究室から成る生物物理部の構想を作り、これを先生に差し出したのはがんセンターへの赴任（三十七年七月）の前、一週間ほどの頃だったと記憶している。もちろん、生物物理部はまだ存在しないので、赴任後、私は生物学部（直良部長）の一つのポストを借りた形で研究を始める一方、新しい部を作る上での業務を進めた。生化学部（杉村部長）、化学療法部（当時部長は空席、のちに福岡部長）、生物学部が今の建物の二階に同居してセミナーも一緒に行なっていた。一階は病院の臨床検査部が使用し、三、四階はまだ空室のままでクモの巣が張り、時に水道管から水が噴き出て大洪水をもたらした。新しい研究所には新しい建物がつきものの現在の風潮からは凡そかけ離れていたが、私には建物のことは全く気にならなかった。差し当っての研究が手動の計算機を使って進められたこともあり、又、京大ではもっと古い明治三十年代にできた煉瓦建の研究室にいたせいもあった。研究所の神代時代にも当るこの頃のことを書き出すと想い出はつきないが、ここにはその余裕はない。そうこうするうち、昭和三十八年十月、愈々生物物理部の発足が認められた。私が赴任して一年三ヶ月目であった。この間に行政上どのようなことがあったか今でも私は全く知らな

いが、生物物理部の誕生がかなりの難産であったろうことは十分推察できた。国立がんセンターの設立構想が作られた時点で研究所を構成する部として生物物理部はなかったし、当初の計画にない部を新しく作ることがわが国の行政組織の上でいかに困難であるかは容易に理解できるからである。しかし、先生は事態の困難さについて私には一言も口にされなかった。私もいざれば部ができることについて一点も疑わなかった。ただ、部ができて数年後、当時の千葉大学長川喜田愛郎先生に特別セミナー（生化学部、生物物理部合同セミナー百回目）をお願いした時、あとで数人歓談しながら生物物理部の成立について先生が語られたのを想い出す。それはかなり困難なものであったし、もし田宮総長がおられなかったら、自分一人の力では到底作れなかっただろうと述懐された。田宮総長、中原所長という当時の日本で考える最高のコンビが、若輩の私の為に一つの部を作ることに種々努力されたことを考えると、私は今でも身の引き緊まる思いがする。これに報ゆる唯一の道は、全力を傾けて生物物理部を立派なものにすること以外にないと私は心に誓った。そして、それは研究者として最もやり甲斐のある仕事でもあった。スローンケタリング研究所の放射線、チェスターピーティ研究所の組織培養を中心にした生物物理部とは異なる独自のものを作り上げたいと希

った。幸いにして、創設当初、実験面では田頭、児玉両博士、理論面では今村博士ら優れた協力者を得て、がん研究所における生物物理部として一つの軌道にのせることができたことは、私にとって何にもましての喜びである。もちろん、先生のご期待には程遠いかもしれないが、私なりに全力を傾けた誠意は先生に理解して戴けたと思っ

ている。現在では生物物理部といってもそれほど奇異に感じないが、昭和三十七年当時はまだ耳新しい言葉であった。

日本生物物理学会の発足が三十五年十二月であり、京大理学部で初めての生物物理教室ができたのは昭和四十三年であることを思えばそれは当然である。このよ

うな時期に、しかもがん研究所に生物物理部を創ることを躊躇なく断行されたのは、慣習にとられない先生の先覚者的フロンティア精神によるものであり、学問の新しい動きに対する鋭い洞察力によるものであった。

未来に向って前進する者を青年と呼ぶならば、中原先生は永遠の青年学徒であった。分子生物学、量子生物学というような、少し専門を異にすれば若い者でも拒絶反応を示すような新しい学問を、六十歳を過ぎた先生がごく当り前のように理解吸収されるのに驚き、頭脳の柔軟さに感服した。先生の理解は枝葉にこだわらず、ズバリと核心をつくものであった。電子構造を基礎に生物現象

を解釈しようという量子生物学についても先生は最もよき理解者であった。それはしかし物珍しさからではなく、学問の発展の歴史的必然へのすぐれた洞察にもとづいていた。複雑な生物現象を徹視的立場から解釈することの困難さを先生は再々指摘された。しかし先生の批判は常に建設的であり、それによって私は勇気づけられるのが常であった。昨年、大阪におけるがん学会特別講演で先生は自からを評論家と呼ばれたが、がんの分野は当然としても、分子生物学、量子生物学まで含めた広い分野で先生ほどすぐれた批判者は世界にも少ないのではない

か。がんセンターに移る前に私が中原先生について知るところとは論文、綜説、著書からだけであった。そこで描いていた私の先生像は直接お会いしてのものと同じであり、そして現在も変らない。私にとって研究者の理想像がそこにあった。真理にあくまでも忠実で、自から信ずる所をマイペースで歩き続けられた。そして、研究の成果もさることながら、研究することの中に限らない喜びを感じておられた。研究所長時代はもちろん、総長になられて後も、自から動物に注射し、観察された。白衣をつけて実験台に向っておられる先生を拝見する度に私は大きく勇気づけられたが、一面又、一生を通じて研究に打ち込める先生を羨しく思った。先生の実験ノートは昨

年十二月二十七日（土）で終っているという。翌日から冬期休暇であり、正月三日に先生が入院されたことを思うと、まさに死ぬまで研究を続けられたといっても過言ではない。しかも、学界の第一線での指導的な立場を保持されながらである。研究者眞利につきるとはこのことをいうのであろうか。ここにも先生の尋常ならざる非凡さを見る。

先生の研究は終始一貫、堂々とがんの本質に迫るといふ感じのものであった。ロックフェラー研究所でのがん免疫の研究、帰国後十年間のウイルス（ラウス）の研究は、五十年後の現在でもがん研究の中心課題である。トキソホルモンを始め、発がん加算説の提唱、4NQO発がん、多糖類の制がん活性など、先生の研究は常に一つの時代を劃し、扇の要の役を果たして広大な拡がりを見せている。五十歳を過ぎてこれだけの大きな業績をあげたがん研究者が果たして他にいるだろうか。もちろん先生の研究が常に順風満帆であったわけではない。過酸化水素発がん説の提唱とその放棄など多くの失敗もある。しかし、それはむしろ当然のこととして悔まれない。「坦々とした大道をいくのは研究ではない。研究はジグザグの道を辿りながら創り上げていくものだ」とよく言われた。そこではむしろ失敗は当然なのである。そしてそこには「死せる眞理よりもむしろ生ける誤謬をこそ」

というジャンクリストフ的探検心があり、フロンティア精神の横溢があった。福井教授が提唱されたフロンティア電子理論（昭和三十七年学士院賞受賞）を発がん化合物に適用することからがんの分野に入った私にとって、中原先生のフロンティア精神に接することは奇しき縁とも思えた。両先生の言われることも又奇妙に一致していた。それは「文献を読み過ぎるな。そして自分の頭で考えよ」であった。

先生が逝かれた今年一月二十一日、私は虚ろな気持ちで先生のご遺体の傍らに坐っていた。先生に直接教へを受け、現在日本のがん研究の中心的存在になつていく多くの人の涙に濡れた顔と、ご遺体の前に嗚咽する姿を見て私は先生の偉大さを改めて感じた。私自身も独りになると溢れ出る涙をどうすることもできなかった。功成り名遂げて高齢で逝く幸福な人を、肉親以外の幾人が涙を送るだろうか。この点でも先生は特別の存在であった。先生はいつまでも生きて戴きたいという皆の願いがそこにあった。このような人格を偉人と呼ばずして誰を偉人と呼ぶのだろうか。十三年余、先生の偉大な人格に直接ふれることができて私のささやかな人生はいかほど豊かなものになったかはかり知れない。人の出会いの不思議さと共に、私はこのことの幸福をしみじみと思う。

（国立がんセンター研究所生物物理部長）

# 中原先生の詠草に思う

福岡 文子

「中原先生を失い、癌研の古い建物も取りこわしとか象徴的なものが一つまた一つと去って行くのは淋しい限りでございます。然し私共はもっと果敢に、ただ前方をのみ見つめて努力、そして精進を重ねて行かねばならないのかもしれない」と森亘先生のお便りにあった。丁度我々が中原先生を長として、いろいろな面で不自由でありながら、それを感じずに学びえたあの戦艦を思わせるような癌研究所の建物がこわされたのは、先生のご他界とほとんど同じ頃であった。（昭和九年五月建築落成、その後戦災にあったがそのままのかたちで復興、先生の他界の数日前まで使われていた。）

先生は、長與又郎、佐々木隆興所長の後、最も苦難な時代の所長となられた。研究所、病院も戦災で、灰塵に來したが、研究の中断もなく、丁度、先生が当時兼任して居られた理化学研究所に移りえたのも先生の研究熱のたまものであった。その際、「癌研には立派な女子の科学者がたくさん居られ、それだけでも価値がありますよ」と言うように誘われたのを記憶して居る。真にその通りで、後に中原先生が癌研初の女性主任研究員として推薦された加藤セチ先生始め、浅井チカ先生、すでにご他界の丹下ウメ、辻村みちよ、黒田チカ先生と、錚錚たる学究がそろって居られた。



理化学研究所で終戦を迎えた。ほっとしたと同時に研究所の入口に銃剣を持った米兵が立つようになった。それは理研にサイクロトロンがあったからで、それを撤去するまでであったと思う。退屈した兵は時々我々に話しかけてきたが戦前には聞いたことがなかった様なスラングに中原先生は、苦笑しながらそれをたしなめて居られた。若い兵士も先生の話を尊敬をもって聞いて居たようだ。

その頃国電の中で、たまたま前総長田宮猛雄先生にお目にかかった。「中原先生の研究の場所は、いつでも用意出来るから、心配しないように」と仰って頂いて感激したことがあったが、その後、その田宮先生に招かれて国立がんセンター研究所長になられたことは、その頃からの田宮先生のお考えによると思われる。

昭和二十一年理化学研究所主任研究員となられて中原研究室をもたれ、その頃同じく理事として仁科芳雄所長を助けられた。サイクロトロン撤去に始まり、理研は改組により科学研究所となった。当時はどこもかしこもと言うように困難の時代であった。癌研の復興に際し、病院はともかく研究所は、癌研究会には重荷でしかなかった。

身も心も研究室にこもり世のさまも身のなるは  
てもわが思はなくに

かにかくに験し試みこと間へどマウスは未だ諾  
はなくに

手触り診る大きミルツに何事のひそみてあらむ

惑ひつつ今日も

動かせぬ實驗結果の前にして未熟な仮説吹き飛  
びにけり

理研の屋上の小さな研究室時代によまれたもので、  
その頃の発がん実験のほろにがいお気持ちがよく出  
ている。

滅菌用の熱にもこと欠き、研究費、月給もどこおりがちでも、先生の研究に対する熱情は冷えることもなかった。そして何にもまして理研の空気はあくまで学問の自由と、次元の高さがあった。然し帰って行く癌研の復興という大仕事があった。その復興をうながし、先生を助けられたのは、高松宮妃殿下その方であった。その出会いは、中原先生の終生の光明となったと思う。

癌の「ほんとう」の原因見出でしと

妃の宮きみやののらししに

ねがはくは癌の「ほんとう」の原因を究めつく  
して答へまつらく

妃の宮えましつ茶を賜ふみ庭に匂ふ紅梅の花

復旧せる癌研究所にありて

わが一生ひとよかけたる業は今日よりと心勇みてうら  
楽しもよ

その間、東京大学から教授就任の要請を持って、落  
合、秋谷両教授が度々訪問され、その後同じく阪大から  
も、招請を受けて居られた。然し先生は、自分は学究と  
してのみとどまりたいと言うことで、お受けにならな  
かったが、それ以後、落合、秋谷両教授は、先生になく  
ならない友人となられた。

先生は癌研究の他、昆虫の研究でも世界的であられ  
た。

バリなる蝶研究者ルムール翁南米の

蝶の新亜種にわが姓をとりて命名せ

しとしてその美しき標本を贈られぬ

「メネラウス亜種ナカハライ」しらべよし名づ

けし君の友情エモシなほ好し

アマゾンの奥地の蝶も名にし負へばわが兄弟はらからと  
いとほしみ見る

いつも研究に中心を置き、研究費や復興費かせぎの辛  
さも漏らされなかったが、そのご苦労は覆うべくもな  
く、十二指腸潰瘍となって現われた。

ベンチジン強陽性と知りしとき心いささか暗く  
なりしか

管瓶の少さき中に幼虫せむし育ちゆく一日ひとひかな  
しも（枕頭に愛好昆虫ヒメカゲローを飼育す）

いたづきは二十日臥りて癒えにけりヒメカゲロ

もまもま作りたり

酒やめぬ煙草も絶たむうつし世のきづなたえだ

えにわれ細りたり

先生は酒豪で、ヘビースモーカーでもあられた。今に  
して思えばその右に出る人はいなかった。

先生の理研時代のお仲間島本先生のお手紙に「昨二十  
一日丁度来客がありまして正午、テレビを入れて始  
めて中原先生の訃報に接しました。先生も先年総長の要  
職につかれ、ご性格上さぞやご辞退の事と存じます。周  
囲の推挙止むを得ざるものがあつた事と拝察します」と  
ある。私も島本先生と同感であつたが、後で聞くところ  
によると決然と自から引き受けられたそうであつた。私  
は先生がもし総長になられなかったなら、塚本総長の許  
で安んじて研究に没頭して居られたことを思い、こんな  
に早く世を去られることもなかったのではないかと思え  
てならない。

私のローマ行きに際し、「チヴィタヴェッキアはロー

マからどの位かかりますか？ 私の為に祈ってきて下さい」と仰りながら、洪澤敬三氏が日本二十六聖人の寺を訪れた時書かれた記事の箇所を開いて、手渡して下さいました。それが先生との最後のお別れとなった。その頃の先生の胸中を察し胸せまる思いである。

今年の文化勲章受章者の決定が報じられた。もし先生ありせばと思った。

昭和五十一年十月二十八日

(前国立がんセンター研究所化学療法部部长)

天啓の域と生るる

秋来りぬわの業成

はいつと知らず

初印

# 中原和郎先生の思い出

西村 暹

小生が初めて中原先生のお近付を得たのは昭和三十三年、東大理学部大学院生の時で、福岡文子部長のご紹介で、パートタイムのような具合で大塚の癌研に実験をしに出入りした時からであった。それ以来、本年一月先生がご急逝になるまで、二十年以上にわたって常に変わらぬご指導をいただいた。先生のお元気な時は、そのご厚意に甘えるばかりで、今さらながら何も先生に報いることができなかったことが悔まれてならない。

昭和三十六年に小生がアメリカに留学するまで大塚の癌研の生化学部に籍を置いたが、当時の生化学部は、その小さな一室に、杉村隆、小野哲生、遠藤英也氏が所員として、又大橋望彦、穂積本男氏が学生として出入りしており、大変に賑やかなものであった。今から考えると

当時は皆が相当好い加減なもので、夜は遅くまで実験していたとはいえ、しばしば昼食後、中庭でピンポンなどに時間を忘れて熱中していたものである。その時よく中原先生がわきを通られたが、「又やっているな」と優しい眼差で、ニコッとされて通られ、決して「怠けているな」という叱責の気配を示されたことがなかった。先生は研究者を管理するなどということは全く考えられたこともなく、不肖な弟子達に全幅の信頼を持っておられたのではなからうか。お若い時の中原先生は大変厳しい先生で、非常にこわいと伺っていたが、小生の知っている中原先生は常に温かい先生であり、二十年間きついおしかりを受けることもなかった。いつもわがままをきいて下さるような気がしてか、若気のいたり、結婚のご媒酌

までお願いし、その時は妻の知人にアメリカ人が多かった事もあり、英語のスピーチをいただいた。穴があれば入りたいほどほめていただいたのだが、出席していたアメリカ人の話によると、格式といい、内容といい、あれ程立派な英語のスピーチは初めて聞いたとのことである。

中原先生にとっては研究の発展が第一の指標であった、そのためには普通では認められないことも許していただけた様である。それ故小生などは癌研に就職後二年にもならぬ内に留学することを許して下さった。先生は又常になん研究は広い視野で進めなければならず、従って生物の発生・分化・増殖の機構の解明に役立つ研究は、それがすぐにはがんの治療の研究に役立たなくとも行うべきだとお考えで積極的に支持して下さいました。先生にとって重要なことは独創的な研究を行うことであって、しかもそれを達成するには自から実験することであるとして、ご自身も最後まで実験をされていた。しかも如何にも実験をするのが楽しそうであられた。研究をするということは研究者の特権であり、それを楽しみ行わなくては何の価値がありやと、又そうでなければよい成果が得られるわけがないと確信しておられた。昨今のように研究がシステム化し、研究者がサラリーマン化する傾向を極度に嫌っておられた。

先生の鋭い洞察力は驚くべきことに最後まで全く衰え

なかった。先生はよい研究とくだらない研究を直感的に見抜く能力を持たれていたようである。小生のかかわっていた研究領域、核酸の化学構造に関する分子生物学的研究は、先生のご専門とはかけ離れていて、先生には細部におそろしい程適格な評価を下されていた。その意味では、先生は細かな事に口を出さなくとも、大変こわい先生であった。

今にして思えば、先生があまりにも我々の手のとどかぬ偉大な存在であったがために、先生のお心に深くふれることができなかつたのではないかとも思っている。先生がお亡くなりになってから、先生も実は相撲のテレビを見るのがお好きだったり、巨人のファンであることを漏れ聞いたが、そのようなことは、我々には気配にも見せぬ先生であった。

やはり我々弟子達にとっては、中原先生は一生かかっても真似することのできない偉大な先生であり、しかも洒落たノーブルな先生という印象がびったりと合っているのである。せめてこれまでの先生のご厚意に報いるには、いつかは優れたがん研究の成果をあげ、又先生が常に示された研究の精神を今後のがん研究の運営の面で反映させることだと思っている。

(国立がんセンター研究所生物学部長)

財団法人がん研究振興会役員  
評議員名簿 (五十音順)

☆役員

会長	岩佐 凱美 (経済団体連合会副会長)	理事	島田 晋 (国立がんセンター連 営部長)	理事	鈴木 治雄 (日本化学工業協会会長)
理事	藤井 丙午 (参議院議員)	理事	杉村 隆 (国立がんセンター研 究所長)	理事	根津嘉一郎 (東武鉄道株式会社社長)
常任理事	花村仁八郎 (経済団体連合会副 会長)	理事	武田長兵衛 (武田薬品工業株式 会社社長)	理事	日向 方齊 (住友金属工業株式会社 社長)
理事	芦原 義重 (関西電力株式会社 社長)	理事	武見 太郎 (日本医師会会長)	理事	三浦 懋 (株式会社島津製作所 社長)
理事	石川 七郎 (国立がんセンター 総長)	理事	長沼 弘毅 (評論家)	理事	安川 寛 (株式会社安川電機製 作所会長)
理事	市川平三郎 (国立がんセンター 病院長)	理事	藤野忠次郎 (三菱商事株式 会社社長)	理事	横山 通夫 (中部電力株式 会社社長)
理事	川上 六馬 (元厚生省医務局長)	理事	堀田 庄三 (住友銀行会長)	理事	赤崎 兼義 (愛知県がんセンター 研究所長)
理事	木州田一隆 (東京電力株式 会社取締役)	理事	三宅 重光 (名古屋商工会議 所会頭)	理事	今永 一 (愛知県がんセンター 病院長)
理事	小林節太郎 (富士写真フイルム 株式会社社長)	理事	矢田 恒久 (第一生命保険相互 会社社長)	理事	梶谷 鑑 (癌研究会付属病院 院長)
理事	佐伯 勇 (大阪商工会議所 会頭)	理事	田実 涉 (三菱銀行相談役)	理事	木村禮代二 (国立がんセンター 病院副院長)
		理事	弘世 現 (日本生命保険相互 会社社長)	理事	小山 善之 (国立病院医療セン ター病院長)
		理事		理事	相良 貞直 (日本対ガン協 会参与)
		理事		理事	島田 信勝 (慶応義塾大学医学 部名誉教授)
		理事		理事	須田 正己 (愛媛大学医学部 長)
		理事		理事	千田 信行 (大阪府立成人病 センター所長)
		理事		理事	日比野 進 (国立名古屋病 院長)
		理事		理事	山下 久雄 (慶応義塾大学医学 部放射線科教授)

☆評議員

財界

延命 直松 (朝日麦酒株式会社社長)  
佐藤保三郎 (麒麟麦酒株式会社社長)

あとがき

本号は故中原和郎先生の追悼号として企画された為、従来のコラムを省略したり、その位置を変更し、又夫々のご寄稿に著者の顔写真をのせることを省略し、中原先生ゆかりの写真や遺作品をのせることとなった次第です。特に中原先生は多才な教養のもち主であられ、絵画・和歌等が多く、これを中原夫人ドロシーさんから拝借するのには田中富子編集委員に何回も中原邸に向いて頂き、またドロシー夫人はこころ良く応じて下さったことに感謝いたします。油絵や蝶のご収集のすぐれたものはカラーで収録した方が良くと言ふ編集委員の意見により、"加仁"が始まって以来最初のカラー頁が出現しました。残念なことに本号はいつも巻頭言を頂く長沼弘毅先生が止むを得ない事情で今回限り休筆されましたが、武見先生

や中原先生ゆかりの諸先生から立派な原稿をいただき、また鼎談には田宮博先生と秋谷先生に昔をしたふ様な話題を提供して頂いたことは望外の幸せでありました。このように良い追悼号が出せることは以上の他に振興会事務局始め編集委員又中でも博谷先生が研究所の代表としてご盡力下さったたまものと思われ感謝する次第であります。この号が少しでも故中原和郎総長の偉大な足跡をしのぶよすがとなるならば幸いであり、もし又至らぬ部分がありますれば宜しくご寛容の程をおねがいいたします。

"加仁"編集主幹 高谷治

編集事務局

榎本 義雄

編集顧問

石川 七郎  
杉村 隆

編集主幹

高谷 治

委員

飯塚 紀文  
笠松 達弘  
北岡 久三  
博谷 和男

小山 靖夫  
島田 晋

田中 富子  
仁井谷久暢

三輪 潔  
山田 喬

米山 武志  
榎本 義雄

「加仁」編集同人

加仁 第13号

昭和五十二年二月一日印刷  
昭和五十二年二月十日発行

定価 三百円  
送料 百四十円

発行人 藤井 丙午  
編集人 高谷 治

発行所

東京都中央区築地五ノ一ノ一  
国立がんセンター内

財団法人 がん研究振興会

電話(542)二五一一(代表)

郵便番号 一〇四号

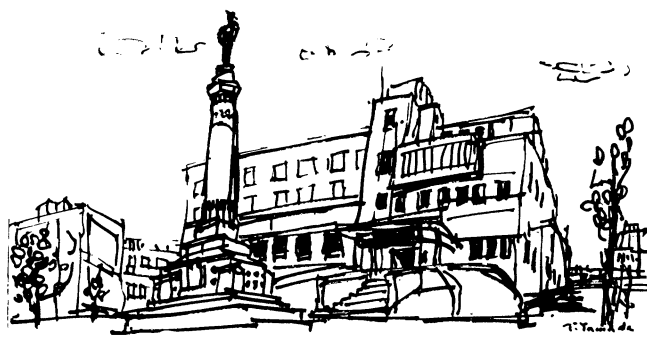
製作 (株)メジカルニュース社

旧

二

頁十三号

昭和五十一年二月一日印刷  
発行人 藤井丙午



# かに

財団法人 がん研究振興会